元、明代ドカムのリンツァン王族史考證

——『明實錄』チベット史料研究（一）——(1)

沈　衛　榮　著
岩　尾　一　史　譯

序
一　リンツァンの位置付けとその簡史
二　「西番三道宣慰司」と「bod kyi chol kha gsum」
三　元代におけるリンツァンのポンチェン
四　明朝がリンツァンを贊善王に封じた理由
五　『明實錄』に載るリンツァン贊善王とその他のリンツァン支族の事蹟
餘　論

序

明朝初期のチベットにおいて有名な「八大教王」が封じられたが、それは實際には大寶、大乘、大慈の三法王と、闡化、闡教、輔教、贊善、護教の五教王がある。そのうち贊善と護教二教王は元々はドカム（mDo khams、現在のカム Khams）に發するが、その他の六王は全てウ・ツァン（dBus gtsang、西洋人の言う Central Tibet であり、およそ現在の西藏自治區に相當す

る）に由來する。この八法王・敎王の封賞及び彼らと明朝との交流史が、明代中藏關係を理解する上で重要な意義をもつことは言うまでもなく、そこでチベット史研究者により相當に重要視されたのである。日本人學者佐藤長氏の大作「明朝冊立の八大敎王について」[2]は、『明實錄』にみえるチベット關係史料と、當時知ることの出來た幾つかのチベット語史書中のうち關連する記載を比較檢討し、八大敎王の歷史を基本的に解明したもので、明代中藏關係史を研究する上では基本的論文である。

その後、チベット語新史料の發見により、八大敎王の研究も含めて明代中藏關係史の研究は進歩した。例えばリンツァンの贊善王についての研究は、最近ではアメリカの學者E・スパーリンクE. Sperling氏の「明の成祖とリンツァン、ゴンジョの僧官」[3]とチベット人學者タシ・ツェリンTashi Tsering氏の「カム地方リンツァン王國史初探」[4]という二論文が世に出た。前者は、『明史』に見える贊善王と護敎王の略傳を翻譯し、永樂期『明實錄』中の贊善、護敎二王と明朝廷の交流に關する記載、更にチベット語文獻の大寶法王カルマパの傳記に見える史實を結び付け、リンツァン、ゴンジョの二王と明朝廷の關係は主に明成祖の時期に集中していること、彼らが封じられたのは實は大寶法王カルマパの推薦にかかること、成祖が彼らを王に封じた目的はただ彼らをしてウ・ツァンとカム間の驛站を再建させて中藏驛路を滯りなく通じさせ、かつまた貢馬を定期的にさせる所にのみあったということを示す。

後者は各種チベット語史料中に散見されるリンツァン王についての零細な記述を集め、大凡の現在にいたるまでの歷史を描き出した。この研究は三つの部分に分かれており、その第一部はリンツァン王の祖先とゲサル王の關係を檢討し、二部ではサキャとパクモドゥパ政權時におけるリンツァンを顧み、三部では種々のチベット語史料の記述をつなぎ合わせて、歷代のリンツァン國師贊善王を年代順にリストアップする。チベット語史料に見えるリンツァン關係の記述は極めてばらばらであって系統的なリンツァンの歷史を整理するにはとても足りず、よって多くの問題が未解決のままである。いつの日か、歷代サキャ王とポンチェン（dpon chen「長官」）、歷代ネドゥン王（sNe gdung）、チベット政府ガンデンポタン（dGa'

Idan pho brang)、歴代モンゴル、満洲皇帝の出した詔令中に見えるリンツァン關係の詳細な史料により未解決の疑問點を解決することを、タシ・ツェリン氏は希望している。[5] ただし、ここには現存する明代チベット關係檔案には言及していない。

實は、明朝、リンツァン間でやり取りされた漢語、チベット語バイリンガルの詔令文書が、少なくとも四通既に知られている。[6] この他、『明實錄』にも正統六年、一〇年の靈藏贊善王喃葛監藏と班丹監粲への勅諭が寫し取られている。『明實錄』中にはリンツァン贊善王とその他リンツァン出身の僧と土官についての記述が、明初の洪武朝より明末天啓年間に至るまで見えており、それらを捜索し利用することによって間違いなくタシ・ツェリン氏の研究における缺を補う事が出來、また我々のリンツァン史に對する理解も豐富にし得るのである。拙稿が意圖するのはすなわち、『明實錄』中のリンツァン關係史料を出來るだけ見つけ出して、タシ・ツェリン氏が論文中にて言及したチベット語史料と比較していくことにより、チベット語史料のみによっては解決し得ない若干の疑問を明らかにし、また、元來不完全である漢、チベット語史料に偏り據ったことにより元明兩代のリンツァン史において生じた幾つかの誤解を訂正することである。

一　リンツァンの位置付けとその簡史

リンツァン（Gling tshang）の名は、元代の漢文史料にはみえず、明代には靈藏、清代には靈蔥、或いは林蔥と音譯される。『明史』には、「其地は四川徼外に在り、烏思藏に視べ近しと爲す」とある。[7] 實際、その地はまさに元代におけるドカムの「旦麻」（デンマ Dan ma）、つまり今の四川デルゲ（sDe dge 德格）のデンコク（Dan khog 鄧科、登科）地域にある。このゆえ、チベット語史料中にも其の地を稱して「デルゲのリンツァン」（sDe dge'i gling tshang）、或いは「デンマのリンツァン」（IDan gling）とする。リンツァンの地はドカム六崗の一つ「セルモガン」（Zal mo'i sgang）の內にあるとも云う。[8] 「セルモガン」はまた「ドゥザ・セルモガン」（'Bru rdza zal mo sgang）とも言うが、「ドゥ」は「ドゥ川」（'Bru chu）の略、

すなわち漢人の言う金沙江であり、「ザ」は「ザ川」（rDza chu）を指し、すなわちヤルン・ツァンポの上流である。ゆえに「セルモガン」はまさに金沙江上流とヤルン・ツァンポ上流の間の廣大な地域をさし、青海の玉樹、四川の甘孜・新龍・石渠・徳格・白玉等の地を包括するのである。[9] そして清代林葸土司が管轄した地は徳格の北、蒙葛結の南、鄧科の西に位置し、現在の徳格縣の俄茲に治していた。『鄧科縣誌略』の説明では、靈葸はその地域の三大土司の一つで東の方にあって、當縣の道路のうち東路は、縣治所の金沙江東山洛窮村を出て「東南のかた行きて布達拉土山を越え、四十里にて朗吉領、四十里にて靈葸に至る」[10]という。しかし、元、明の間リンツァンの一族が管轄する範圍の廣さはこれに止まらなかったはずで、リンツァンは青海、カム、チベット閒古代交通の要の位置を占めていたのである。

リンツァンの歴史のうち分かっている所は大凡以下の如くである。モンゴル＝元―サキャ時代、リンツァンの番僧がドメーのポンチェン（mDo smad dpon chen）に封じられたことがある。明永樂五年（一四〇七）成祖により灌頂國師・贊善王に封じられ、それ以來明末に至るまでリンツァンの一族は王號を世襲し、朝貢は絶えなかった。清代には四川布政司所屬の大土司の中に林葸安撫使司の名があり、[11] 正式には「四川建昌道打箭爐靈葸按撫司」と稱していた。清末宣統元年（一九〇九）徳格が平定されると、鄧科、高日、春科、靈葸の四土司の地は合併され鄧科府が置かれ、民國元年（一九一二）になって鄧科縣に改められた。[12] 當時、リンツァン土司は僅かに白利土司管轄下の一土百戸でしかなく、宣統二年（一九一〇）五月白利、東科、偵倭土司と共に改土歸流を申請しており、[13]「宣統三年（一九一一）春、民政部改流を奏准し、各省土司咨行し辦理す。夏五月、暑川督趙爾豐、代理邊務大臣傅嵩炑に會同し、檄して靈葸土司をして印を繳して改流し、地を將て鄧科府に歸併せしむ。[14]」とある。林葸土司は、「改めて把總世襲と爲し、毎月俸祿六兩、一年共に七十二兩、均しく糧稅の項下に由り年を按じて發給[15]」していた。かつて改土歸流の事務に直接參與した傅嵩炑（一八六九―一九二九）はその書『西康建省記』中の一節「靈葸改流記」において、「靈葸土司、徳格疆域の中に在り、人民數百戸、地僅か數村のみ[16]」と述べる。靈葸土司汪青登曾曲甲（dBang phyug bstan 'dzin chos rgyal）はその改土歸流を申請する呈文中において自ら、「小的

官寨三座、一名八噶、一名穀四、一名松噶を現有し、小的　八噶、穀四兩寨を將って呈繳し公に歸するを願うも、惟だ松噶一寨及び徂拉納仲家具は原有せる地格撒翁斯東空等地方と、懇恩すらく、小的に賞與して耕居納糧せしめ、以て過活を資けんことを」と稱する。彼の願いは清政府の批准を得た。(17)

リンツァンが元明期の繁榮から清代の沒落へと向かう、その狀況はどんどん惡化する一方と言うべきものだが、その原因については更なる究明が必要である。明代にチベットで實施された「多封衆建」政策が、リンツァン一族の內部分裂、勢力の減退を導いた重要な原因であるのは疑いなく、これについては後述する。しかしその土地、勢力が絶え間なく失われたのは、デルゲ土司等強豪な近隣の勃興と無關係ではない。かつて、元來リンツァン土司に屬していた朗吉嶺四村をデルゲ土司の家廟、八邦寺が占領して連年の兵事を引き起こし、最終的にお上に判斷を仰ぎ、漢官が管理することになったという出來事が、清末西康の「改土歸流」の責任者趙爾豐によってかなり詳細に記錄されている。そこには、八邦寺はデルゲ土司と結託し、デルゲ土司一族の血筋であったリンツァン土司の祖母を騙して證文を書かせ、遂には目的の朗吉嶺四村占領を果たした、とある。(18) これは間違いなくリンツァンが何故にかくの如く衰退したのかを解釋する絶好の證例と言えよう。先述の通り鄧科縣內の道路は、その東路は朗吉嶺から靈蔥にいたるまで四〇里であり、リンツァンはこの時だけで、廣い土地を失ったことがわかる。當然ながらリンツァン土司はすでに清末には重要な地方勢力ではなかったのだが、ただいわゆるリンツァン王（Gling tshang rgyal po, Gling gyi rgyal po）、またはリンツァン國師法王（Gling [tshang]' gu zi chos rgyal）は、ドカム地方にて長い歷史を有する地方土司として、依然「帳幕は林立し、牛羊は群れを成し」ていた。鄧科縣には官話小學が三箇所あり、その內の一箇所はまさにリンツァンにある。リンツァンのニンマ派（紅敎）寺院である塞木寺は、また當縣最大の寺院であって、そこには二五〇人餘りの僧がいたのである。(19)

二 「西番三道宣慰司」と「bod kyi chol kha gsum」

リンツァンの歴史は明朝が封じた灌頂國師・贊善王によって最もその名が知られるようだが、リンツァン王、あるいはリンツァン土司の立身は實はモンゴル＝元時代に始まる。[20] 元代の漢文文献中には直接リンツァンのことに言及したものはおしなべて無く、チベット語文献中にもまたリンツァンについては寥々たる記述が幾つかあるのみなのだが、しかしこの僅かな情報からリンツァンの昔日の輝めきを推測することは難しくなく、なぜリンツァンが結局明朝廷によって教王に封じられたか、その原因が明確になるのである。

チベット語文献において、リンツァンに言及するうち最も鍵となる一文は、一五世紀末に成った有名な史書『漢藏史集』*rGya bod yig tshang* に見える。同書のサキャ派の歴史に關する章においてウ・ツァンのポンチェン（dBus gtsang dpon chen）二七人の名を詳しく列擧しており、その後に作者は次のように附記する。「その【二七のポンチェン】はラマの法旨と皇帝の詔令に従い、【政・教の】兩方を護って、國土を安寧にし、教法を盛んにする。それと關連するのは、ドカムのゴンジョ、ドメーのリンツァンで、各道（chol kha）にはそれぞれポンチェンがいる」。[21] タシ・ツェリン氏はこの史料に言及はするが、特に詳しい説明はない。だが、それはまさしく元代におけるリンツァンの位置を明らかにする一助となり得る、最も重要な手がかりなのである。

このくだりを理解する鍵は「chol kha」とは何か、ポンチェンとは何かを明らかにすることにある。此れについて、我々はまた先の『漢藏史集』の説明から着手してもよかろう。すなわち、「ポンチェンというのは、チベット人がラマの近侍に付けた特別な名稱で、chol kha とは、モンゴル皇帝が灌頂を受けた時、供養としてラマに獻上したドカム、ドメー、ウ・ツァン等の地に對し、名を付けたのである。[22]」。ここでいうラマとは、元朝第一位帝師のパクパを指し、モンゴル皇帝は世祖クビライを指す。パクパ帝師はかって三度クビライ皇帝及び皇后、王子等にサキャ派の密法と喜金剛三續の

大灌頂を授け、またクビライ汗もウ・ツァンの一三萬戸、チベット三 chol kha 等供養を次々賜って報いたと傳えられている。[23] チベット三 chol kha の境域は、『漢藏史集』にまた明確に境界分けしている。

ジャユル、ガリ、グンタンより以下【東】、ソクラキャボより以上【西】は、【ウ・ツァン】正法の chol kha である。ソクラキャボより以下、黄河河曲より以上は【ドカム】平民の chol kha である。黄河河曲より以下、中國の白塔より以上は、【ドメー】馬の chol kha である。人、馬、法の三【chol kha】の朝貢は例に倣って行い、各々の chol kha にはそれぞれ一名のポンチェンがいて、皇上施主と福田兩方が協議して任命する。[24]

これ以降チベット語文献ではチベット三 chol kha の説明がかなり流行し、人々はすでに chol kha を一般的な地理單位の名稱とすることに慣れてしまい、その本來の意義に注意しなくなったのである。しかし傳統的な地理區分によると、チベットは通常ガリ三域（mNga' ris skor gsum）、ウ・ツァン四ル（dBus gtsang ru bzhi）、ドカム六崗（mDo khams sgang drug）に分けられるのであり、ここでいうチベット三 chol kha とは明らかに異なる。そうすると、chol kha とはまさにチベット固有の地理概念ではなく、モンゴル＝元時代に導入された新たな名稱であることがわかるのである。そこで、元朝期のモンゴル語におけるこの語の本來の意義を明らかにするのは、チベット三 chol kha の實際の意味を正確に理解する一助となろう。

實際の所、早くも七〇餘年前にペリオ P. Pelliot がすでに指摘しているのは、チベット語の chol kha とはすなわちモンゴル語の借用語で、その原語は ḫölgä である、そして ḫölgä とはモンゴル語文献中ではまさしく漢字の「路」の對譯である、そしてこの語は「路」という意味とともに、chol kha という綴りにてチベット語に移植されたのである、ということである。[25] ペリオのこの解釋は間違いなく正確だが、しかしもしチベット三 chol kha をそのまま「土番三路」と解釋するのは、誤解である。というのは元代には「土番三路」という行政區畫は特に設立されていないし、烏思藏納里速古魯孫等三路宣慰使司都元帥府のうちの三路が指すのは烏思（ウ）、藏（ツァン）、納里速古魯孫（ガリ三域）の三路であって、

チベット三 chol kha とは明らかに異なり、それはただチベット三 chol kha 中におけるウ・ツァン、つまり法の chol kha でしかないのである。

上述したチベット三 chol kha の地理區分と對照すれば、それらチベット三 chol kha の區分と、元代においてチベットに設けられた吐蕃等處宣慰使司都元帥府（＝朶思麻宣慰司）、吐蕃等路宣慰使司都元帥府（＝朶甘思宣慰司）、烏思藏納里速古魯孫等三路宣慰使司都元帥府（＝烏思藏宣慰司）とが同一であるとみることは難しくない。元代に漢語文獻中にも「烏思藏、朶甘思、朶思麻三路」という表現が現れるとはいえ、[26] より正確な表現は「西番三道宣慰司」[27]であるべきであり、元代の宣慰使司は第一級の地方組織なので、行政區畫上でもまた「道」と稱されたのである。だから、Bod kyi chol kha gsum の最も正確な譯は「西番三道宣慰司」である。[28] チベット語史料中の chol kha、dpon chen に關する記述と漢文資料中の「西番三道宣慰司」關係の記述を對照すると、チベット語史料に言う chol kha が實際には宣慰司を指しており、そしていわゆる dpon chen がまさしく宣慰司の長官である宣慰使都元帥を指す、と確定するのは難しくないことである。[29]

元朝のチベット管理行政機構をみると、中央における第一は宣政院であり、

> 秩從一品、釋教僧徒及び吐蕃の境を掌り之を隷治す。遇ま吐蕃事有れば、則ち分院を爲り往鎭せしめ、亦た別に印を有す。大征伐の如くは、則ち樞府を會して議す。其の人を用いるは則ち自ら選を爲す。其の選を爲すは則ち軍民通じて攝し、僧俗並びに用う。

のであった。[30] 名義上宣政院は帝師に統率されていたが、實際の權力は院使の手中に握られていた。元人自身の說明によれば、

> 國家區宇を混一するも、而も西域の地尤も廣く、其の土風は悍勁にして、民俗は武を尙び、法制禁ず能わざる者有り。惟だ佛に事うるに謹爲り、且つ其の敎えに依るのみ。故を以って河より以西直ちに土蕃西天竺諸國邑に抵るまで、其の軍旅、選格、刑賞、金谷の司は、悉く宣政院の屬に隷するは、邊陲を控制し、畿甸を屛翰する所以也。

という。[31] 宣政院の下には吐蕃等處【朶思麻】、吐蕃等路【朶甘思】と烏思藏納里速古魯孫等三路宣慰使司が分設され、大チベット地區全體を管理していた。元朝の制度によると、「宣慰司、軍民の務を掌り、道を分け以て郡縣を總べ、行省に政令有れば則ち下に布し、郡縣に請有れば則ち爲に省に達す。[32]」とある。それは中央政府が邊境地區において設立した特別行政地區なのである。元代チベットの朶思麻、朶甘思、烏思藏等三つの宣慰使司は行省に隷屬せず、直接に宣政院の管轄に屬した。チベット人自身の説明によると、宣政院管轄の三宣慰司の地は一行省に不足するといっても、帝師が居られる佛法が盛んな土地であるので大凡一つの行省に相當し、行省一つとして數えて、【全部で】十一であるという。[33] 西番三宣慰司の奏請は宣政院より皇帝の前に轉呈され、朝廷のチベットに對する詔令は宣政院を通して各宣慰司に下達され執行される。宣慰使司都元帥府は秩從二品、宣慰使四、五員を設け、屬下は軍民萬戸府、總官府、招討使司、軍民安撫使司がある。たとえば烏思藏納里速古魯孫等三路宣慰使司都元帥府にある屬下の主な機關は、有名な烏思藏一三萬戸である。[34]

チベット語文獻のチベット三 chol kha がまさに漢文文獻中の西番三道宣慰司にあたるのを確定できたとはいえ、チベット語歷史文獻の記載が完全とはいいがたく、なおいまだ多くの問題が未解決である。漢語文獻の記述に依ると、西番各宣慰司の宣慰使はそれぞれ四、五名を有するが、[35] チベット語文獻には各 chol kha にはそれぞれ一人のポンチェンがいるのみと述べる。實際、ドカム［ゴンジョ］のポンチェンとなったトンツル（sTong tshul）はその位にあったときには吐蕃宣慰使・都元帥のウイグル人葉仙爾の下にいたようだ。[36] 尤も困惑させられるのは、『漢藏史集』に既に「ドトェ（mDo stod）のゴンジョ、ドメーのリンツァンにはそれぞれ一 chol kha があり、各 chol kha に一人のポンチェンがいる。」とあることで、再び當書の述べるチベット三 chol kha 地理區分を見ると、ドメーとドカムの兩 chol kha の境は黄河河曲になっており、リンツァンとゴンジョの二地はドカムにあることになる。漢語文獻にもまた「突甘思旦麻」とあるので、リンツァンはドカムの地にあることになる。『元史』百官志には西番三道宣慰司の治所はいずれも明確に説明されておらず、一般に河州（今の甘肅臨夏）をもって朶思麻宣慰司の治所、サキャを烏思藏宣慰司の治所とするが、朶甘思宣慰司の治所

は詳しくは分からず、或いはデンマを治所とする向きもある。[37] 明の太祖洪武年間には、まず西安行都指揮使司を河州に設けて河州、朶甘、烏思藏の三衛を統轄し、後に再び朶甘、烏思藏衛を昇して行都指揮使司にしている。治所を河州に設けた西安行都指揮衛使司の職掌はおよそ元代の朶思麻宣慰司と同じであるので、元代朶思麻宣慰司の治所もまた河州にあったと確定することは道理である。共にドカムの地にあり、且つそれほど遠く離れていないリンツァンとゴンジョが、かつてそれぞれがドメーとドカムの二宣慰司の治所であったとは想像できないことである。より可能性のある解釋としては、リンツァンとゴンジョはドカム地方の二貴族として、パクパ帝師の親しい信用と推擧を受けてそれぞれドメーとドカムの宣慰司の長官に任じられたのを、後人がこれをよく考えずに「ドカムのゴンジョ、ドメーのリンツァンは各々の道（chol kha）にそのポンチェンがいた」と言ったということなのであろう。

西番三道宣慰司の治所を確定するのには、『漢藏史集』中の一記述が、あるいは新たな契機を提供してくれるかもしれない。同書には、クビライ汗が大臣答失蠻をチベットに派遣し驛傳組織を建てさせたことを記した一節があり、

> ダーシュマン（答失蠻）は、必要なラマの法旨と皇上の詔誥を賜り、多くの侍從を率い、往來に必要な物品及び大小の內庫より得た、チベットの僧、俗、長老、權力者に與える素晴らしい品物を持って西へ向かい、まずは後傳正法の發祥地であるドメー地方のデンティク水晶佛殿（IDan tig shel gyi lha khang）に達し、そして順にドカム地方のツォムドサムドゥプ寺（gTso mdo bsam 'grub）、ツァン地方の具吉祥サキャ等の地に行って民衆を集め、なすべき通りに賞を分配し、詔を宣讀した。

とある。[38] ここに明白に述べられている三寺院は、おそらくそれぞれが西番三道宣慰司の治所である可能性がある。元代のチベットは多くが政教合一であり、あるいは一地方の貴族と一宗派が提携し、あるいは一つの家族內で二枝に分かれ、政、教を分掌している。地方自治の色合いを濃厚にもつ西番三道宣慰司が三寺院それぞれをもってその治所としたというのは、道理にかなっていると思われる。サキャが烏思藏宣慰司の治所であったことは間違いなく、サキャは元來帝師パクパが領

するサキャ派の本據地であり、サキャポンチェンはまたウ・ツァンポンチェンとも稱し、初代サキャポンチェンであるシャーキャサンポ（Shʻakya bzang po）が烏思藏納里速古魯孫等三路軍民萬戶府に封じられて、以降多くの歷代ポンチェンは宣慰使・都元帥の稱號を受けており、烏思藏納里速古魯孫の行政の中心は明らかにまさしくサキャにあったのである。デンティク寺は、現在の青海省化隆回族自治縣内の循化縣城、黄河の北岸約一〇km餘にある小積石山にあってチベット後傳佛教の發祥地で各宗派の徒あこがれの聖地であり、チベットから中國内地に朝貢する僧の多くがこの寺に赴き參拜した。(39)『秦邊紀略』には「河州 東は臨洮の倚有り、北は蘭・莊の軛有り、南は洮州の塞有り、西は西寧の環有り」(40)とあり、明らかにデンティク寺は河州内にあるので、大凡元の朶思麻宣慰司の治所は河州であると言って間違いないが、より正確な地點はおそらくデンティク寺であろう。ツォムドサムドゥプ寺を元の朶甘思宣慰司の治所と推測することについても、また多くの證據がある。『漢藏史集』には幾度もドカムのツォムドサムドゥプ寺に言及されていて、前述したダーシュマンがチベットに使いしてそこで號令し分賞した以外、またパクパが火龍の年に漢地よりチベットに戻る時ドカムのツォプド新寺（mDo khams rTsob do gnas gsar）を通り、一日で大近侍トンツル（Nye gnas chen po sTon tshul）をはじめとする人々が獻じる大寶經典一千五百卷及び土地、寺院、屬民、財寶など大量の供物を受けたことを述べている。(41)同書のナムギェルリンパの歷史（rNam rgyal gling paʻi lo rgyus）に關する章では、またかつてチュミク（Chu mig）萬戶やサキャ内臣を任じた大近侍ゴンポキャプ（Nye gnas chen po mGon po skyabs）の子であるドンドゥプギェルツェン（Don grub rgyal mtshan）は帝師クンガーロドゥー（公哥羅古羅思 kun dgaʻ blo gros）に追隨し、遂にはドカム第二の大寺ツォムドサムドゥプの大近侍（gDan sa bar pa gtso mdo bsam grub kyi nye gnas chen po）となり、印を持し事務を執った、とある。(42)ここでは、ツォムドサムドゥプ寺は第二の大寺と稱されているが、あるいはこの寺がサキャ寺以外でサキャ派に屬するうちの第二の大寺ということを指すのかもしれない。同書にはパクパの甥ダルマパーラクシタ（bDag nyid chen po Dharmapālaraksita）がかつてドカムにて七年閒住持なさり（ʻdis gdan sa lo bdun mdzad）、またドカムにて圓寂したと記す。(43)この閒彼が住持してい

た寺とは、恐らくまさにサキャ第二の大寺ツォムドサムドゥプなのだろう。かつてツォムドサムドゥプの大近侍に任じたナムギェルリンパ一族の開祖ドンドゥプギェルツェンもまた宣慰司の大長官（Son wii mi dpon chen po）と稱され[44]、これら種々の情報により、ツォムドサムドゥプ寺はおそらく朶甘思宣慰司の行政の中心であり、朶甘思宣慰司の治所であったのだという推測に導かれるのである。この推測はまた『明實錄』の記載にて支え得るのであり、『明實錄』太祖洪武七年七月己卯條には、「朶甘烏思藏僧荅力麻八剌及び故元帝師八思巴の後公哥監藏卜使を遣わして來朝し師號を請うに、詔して荅力麻八剌を以って灌頂國師と爲し、玉印海獸紐を賜い、脅多桑古魯寺に居せしめ、護持十五道を給す[45]。」とある。明初のツォムドサムドゥプ寺はやはりドカムにおける重要地點であったことがわかる。この寺の場所については、L・ペテック L. Petech 氏によれば、これはアムド南部に位置し、つまりマルカム（sMar khams）のツォムドであって、またTsom mdo、Tsom mdo gnas gsar とも稱し、黄河の下流右岸、東經百一度三〇分、北緯三二度三〇分の所にあり、これは有名なガルトク（sGar thog）を中心とするマルカムと同一地方ではなく、そこは前者より南に二度下がったところにある、という[46]。ツォムドサムドゥプ寺はゴンジョからは遠くないはずで、かつてこの地においてパクパに對し大量の供物を獻上した大近侍トンツルはまさにゴンジョ出身であり、「ドカム・ゴンジョのホルチェンであるトンツル」と呼ばれたのである[47]。

三　元代におけるリンツァンのポンチェン

先ほど引用した『漢藏史集』の記述では、リンツァンはつまりmDo smad chol kha のポンチェンの、mDo smad chol kha とはまさに朶思麻宣慰司であって、正式には吐蕃等處宣慰使司都元帥府といい、その「ポンチェン」はまた當宣慰使司都元帥府の長である宣慰使・都元帥に對するチベット人の呼稱であった。だからリンツァンの頭目の實際上の地位は朶思麻宣慰使司の宣慰使・都元帥であって、チベット語文獻中にて「リン【ツァン】のポンチェン都元帥」（Gling gi dpon

chen du dben sha) と稱するものがあるのは、すなわちその證據である。(48) これと相應して、ゴンジョの頭目はまさに吐蕃等路宣慰使司都元帥府、つまり朶甘思宣慰司の宣慰使・都元帥であり、彼らはみな元代に封じられた從二品の高官なのである。

史料の制約のため、モンゴル＝元時代のリンツァンの歷史について我々の知る所は少なく、吐蕃等處宣慰司についての理解もまたより深化させる必要がある。現在あるチベット語文獻中の零細な記述から見るに、リンツァン一族が世に出たのは元の帝師サキャ派ラマ、パクパと直接の關係があったはずである。先述した『漢藏史集』の說明では、「ポンチェンというのは、チベット人がラマの近侍に付けた特別な名 (che ming)」とあった。宣慰司のポンチェンとはつまり宣慰使・都元帥で二品官ではあるものの、元朝のチベットにおける行政管理の特殊性により、サキャ帝師のチベットにおける地位は最も重大であった。いわゆる

> 元朔方に起こり、固より已に釋教を崇尚す。西域を得るに及び、世祖其の地廣くして險遠、民獷にして鬪を好むを以って、其の俗に因りて其の人を柔らぐゆえ有るを思い、乃ち土番の地に郡縣し、設官分職して、而して之を帝師に領む。乃ち宣政院を立て、其の使爲りて位第二に居する者は、必ず僧を以って之と爲し、帝師の辟擧する所に出で、而して其の政を內外に於いて總べる者は、帥臣以下、亦た必ず僧俗並びに用い、而して軍民通じて攝す。是に於いて帝師の命、詔勅とともに並びに西土に行わる。(49)

である。だから、元朝がポンチェンに任じた者が皆サキャ派の近侍、側近であるというのは、まさに當時の事情に符合するのである。ウ・ツァンのポンチェンはまたサキャポンチェンとも稱するが、其の內、多くはサキャ派の內臣 (nang chen) から、またある者はサキャ派の側近である萬戶長から昇任しており、要するに皆帝師に辟擧され、朝廷の認可を得たのである。ドメー、ドカムのポンチェンを任じるのも、當然またこの例に倣ったのだ。パクパがドカムの地を通過したとき、またリンツァンを訪れ、そこで熱烈な接待を受けたと傳えられる。(50) しかし、筆者は今までパクパとリンツァンの僧

俗とのやりとりに關する直接の記述をいまだ見つけておらず、リンツァンがサキャ派より寵愛を受けた由縁を明確にする術をもたない。

『漢藏史集』のタクナゾンパの歴史（sTag sna rdzong pa'i lo rgyus）の章、冒頭に次のようにある。

衆生の頭飾りである具吉祥サキャ派が吐蕃三道宣慰司を統治したとき、功業を建立するポンチェン、ラマ、ゲシェー、學者が現れた。彼ら無數の賢哲偉人中、最も早くサキャに對し大功を立てた三人とはつまり、ドムパ・サキャポンチェンのシャーキャサンポ、東方ドメー地方ツォンカのゲシェーであるリンチェンツォンドゥー（Rin chen brtson 'grus）、ドカム地方ゴンジョのリンポチェントンツル（Rin po chen sTon tshul）の三人である。(51)

この三人は、サキャ派とディグン派が衝突したので上都に赴き元朝の支持を求め、結果願う通りになり、遂にサキャ派中最も權勢のある功臣となったと傳えられる。シャーキャサンポが最初のサキャポンチェンであることを考慮すると、トンツルも一二七四年前後にはパクパの推薦を受けてドカム六崗の總管（spyi'i bdag po）に任命されていたのであり、それはおそらくドカムのポンチェンであろう。(52) また、東方ドメー地方ツォンカ出身のゲシェー・リンチェンツォンドゥーがまさしく朶思麻道宣慰司の初代ポンチェンであるとも推測できる。ただし彼とその後裔は最終的にはサキャ派治下の後藏にて重要な地方勢力となったのではあるが。今に至るまでゲシェー・リンチェンツォンドゥーとリンツァンのポンチェン或いはリンツァンの一族との關係を説明するような資料は無いが、しかしリンツァンはチベット語史料においてまたシャルカのリンツァン（Shar kha Gling tsong）とも稱されており、(53) シャルカというのは、恐らくは「東方ドメーのツォンカ」（Shar mdo smad tsong kha）の略稱であるはずなので、二者は無關係ではあるまい。

もしシャルカのリンツァンと東方ドメー地方のツォンカ出身のゲシェー・リンチェンツォンドゥーとの間に深い關係があるとするにはいまだ證據不足の嫌いがあるとするなら、リンツァンとギャンツェ法王一族、および元代モンゴル朝廷においてパクパに續く地位のチベット佛教僧ダムパ（膽巴）國師との關係を説明したなら、ずっと容易に理解できよう。チ

ベット語文献における僅かな記述においても、パクパとドメー地方デンマとの特別な深い關係を見つけるのは難しいことではない。漢語の史書をみるに、西番國師ダムパ國師の出身は「西番突甘思旦麻」であり、かつてサキャパンディータ・クンガーギェルツェンの弟子で、パクパ帝師の推薦を受けて朝廷にて寵を得たが、帝師は「職を辭してチベットに歸り、敎門のことは【ダムパ國】師に託し」[54]た。ダムパ國師は世祖、成宗の兩朝に仕え、大黑天神に祈禱して陰から王業を助け、且つ應對がうまく、辯才があったので時の名聲を得た。[55]チベット語史書の記述には、ダムパ國師はデンマのガパ（IGa pa）出身であり、よって人は彼をガのアンニェンダムパ（IGa Ang snyen dam pa）と稱した。一二六七年、パクパ帝師がチベットに歸る途中この地に至り、僧俗信者一萬餘人を集め、盛大に法會を擧行して、この地は遂にはティドゥ（Khri 'du 一萬人が集まるという意）と稱された。ここで、パクパ帝師はダムパ國師に命じて尕藏寺（sKar zang dpal 'byor dgon pa）を建てさせ、金・銀寫の大藏經等の法寶を賜り、この寺をすみやかにドカムにおけるサキャ派の大寺に仕立て上げて、寺僧は多い時には一九〇〇人に達した、とある。[56]

注意すべきは、この有名な元朝國師が、意外にもチベットにて名の知れたギャンツェ法王の先祖であるということだ。『漢藏史集』中には、

> 上部デンマのガ【パ】の地にて、ガ・アニェンダムパという名の裕福で善品を信仰する者が現れ、ガ、デン、テボにて、飛檐を有する中國式屋根の佛殿一〇八座を建て、その佛殿それぞれの中には希有な法寶【佛像】及びカンギュル一揃いを立てられた。その前には明妃と眷屬【像】があり、五供を途切れなく供養し、等善業、等圓滿儀軌の大事業を爲さっていた。彼の甥子様の繼承者であるデンマオンボ、サンポギェルツェン御父子及び侍從は清淨なるウ・ツァンの地と、特に具吉祥サキャパの尊前にお越しになった。[57]

とある。そして彼らの後裔はまさに、後にサキャ派に付き隨うことによりチベットの地に立身した、有名なギャンツェ法王一族なのである。ギャンツェ法王一族の名は東方デンマのシャルカワ（Shar phyogs ldan ma las skyes shar kha ba）に由

來し、前述の通り、リンツァンの贊善王一族もまたデンマのシャルカワ一族に屬していた。リンツァン一族とギャンツェ法王が同宗同源であるのを確認するのは難しいが、彼らがともにシャルカワ一族に屬するというこの事實は、二者間の關係が緊密であることを説明する。傳説ではリンツァン一族がつまりゲサル王の兄の後裔であり、そしてギャンツェ法王一族はゲサル王の女婿の後裔であると稱しており、[58] これもまた二者が同じ一族から出たことの傍證であると認めうる。リンツァンはシャルカワ一族、あるいはダムパ國師との關係が緊密なのだから、サキャ派が重く用いたのも不思議とするに足らないのである。

この外、リンツァンとゴンジョの緊密な關係もまた明らかに、リンツァンがモンゴル＝元時期にドメーポンチェンとなった重要な原因の一つである。『司徒遺教』には、トンツルがドカム六崗の主（mDo khams sgang【drug】gi bdag po）に任命された後、親疎、遠近を區別せず、また皇上施主・福田のお考え通りに自ら總主（spyi'i bdag po）となり、彼の地であるゴンジョでは宣慰使、萬戸長、千戸長さえをも任命しなかったが、リンツァンの頭目を任用し、リン【ツァン】の萬戸長と千戸長に任命した、とある。[59] 同書はドメーに關する記述中にてリンツァンのポンチェンであるシャーキャギェルツェン（Gling tshang pa'i dpon chen Sh'akya rgyal mtshan）に觸れ、またリンツァンとパクモドゥ派（Phag mo gru pa）との關係が緊密であって、その中心デンサテル寺（gDan sa thel）にはリンツァン出身の人が一〇人いる、と述べる。[60]『ギャンツェ法王傳』にもサキャ派がドカムに設けた官職はゴンジョ、リンツァン、シャルカ、デンマの四箇所あったと述べる。[61] それらの土地の閒柄は、地域が隣接しているというのみならず、極めて緊密な一族血緣という深い關係であったはずであり、前述したリンツァンとシャルカの關係もまさしくその證例である。そしてリンツァンとゴンジョの關係もまた同樣であり、ゴンジョの頭目にはリンツァンの一族出身の者がいたのであるが、これについては後述しよう。まさにこの理由により、明らかにドカム地域での幾つかの一族は互いに援けあって當地の重要勢力となっていたのである。その上パクパが中藏閒を行き來する途上、ドカムを通過するときその熱烈な接待を受けた。だからこそ彼らは親任、信用されるものとなり、重

任を委ねられたのだ。(62)

元代のリンツァン、または朶思麻宣慰司の歴史になお未解決の疑問が幾つかあることは、認めねばならない。例えば、ドカム地方にあるはずのリンツァンが何故「ドメーのリンツァン」と呼ばれるのかというような問いには、我々はいまだ満足の行くような答えを持ちあわせていない。明代の朶思麻河州屬下の二四族熟番中に靈藏族がおり、(63)『明實錄』にも河州熟番靈藏が二度言及される。萬曆一〇年（一五八二）一二月甲午條に、「陝西弘化寺靈藏族番僧領眞俄竹等の進貢至り、宴賞を賜うこと例の如し」とある。(64)しかし、明代に大慈法王に封じられたゲルク派の大德シャーキャイェシェーが創建した弘化寺と近い關係にある河州靈藏族と、「突甘思旦麻」に居るリンツァン贊善王一族とがどんな關係なのか、詳しくはわからないのである。この類の問題に答えるには、新資料の出現を期待する他無い。(65)

四　明朝がリンツァンを贊善王に封じた理由

モンゴル＝元時代におけるリンツァン、ゴンジョ兩一族の實際の地位が明らかになれば、明代において彼らがそれぞれ灌頂國師贊善王と護教王に封じられたのが何故かを理解するのも難しくはないのである。明の成祖永樂帝が彼らを王に封じたのは、スパーリンク氏の言うような、ただカルマパ五世の影響のみによって、ウ・ツァンと中原間における驛路の滯りない交通を確保し、カルマパが入朝するのに便宜をはかろうとした、(66)というようなことは有り得ない。明代初期のチベット地域における施政は、元がチベットにおいて様々設置したものの接收と改編に重きが置かれていた。早くも太祖洪武四年（一三七一）明朝廷は吐蕃等處宣慰司を河州衞に改編し、元時代の宣慰使何鎖南普を河州衞指揮同知とした。(67)洪武六年（一三七三）二月には、「詔して烏思藏、朶甘衞指揮使司宣慰司二、元帥府一、招討司四、萬戶府十三、千戶所四を置く、故元國公南哥思丹八亦監藏等を以って指揮同知、僉事、宣慰使同知、副使、元帥、招討、萬戶等官となすこと凡そ六十人。(68)」とあり、基本的には元代のチベット統治システムの原型を維持している。洪武七年（一三七四）七月、元代の朶思麻、

朶甘思、烏思藏の三宣慰司は正式に西安【河州】、朶甘、烏思藏の三つの行都指揮使司に改編され、[69]元朝が封じた大小の官員で凡そ來朝し進貢した者は、均しく明朝廷に認められ續けて封じられた。明朝には存在しない官名も、元朝の先例がありさえすれば、また同樣に認められ得た。[70]この故に、リンツァンとゴンジョの頭目が元朝の時における二品官のまま明朝廷に改めて敘用されたのも、道理にかなった事なのである。『明實錄』に據れば、リンツァン一族の「剌兀監藏」が「洪武中率先して朝貢し、朶甘衞都指揮使を授け」られたという。以後、永樂四年（一四〇六）、明朝廷はまた【靈藏】箚思木頭目撒【撒】力加監藏（Sangs rgyas rgyal mtshan）に授けて朶甘衞行都司都指揮使と爲」した。元、明兩朝のチベット政策變化の過程はここに一斑を見る事が出來る。この故、少し後に明成祖が剌兀監藏の弟、著思巴兒監藏を贊善王に封じたのには、元來その他に特別な理由は必要なかったのである。彼らと同時に封じられて教王となった者にはパクモドゥの頭目である闡化王、ディグンの頭目である闡教王、タクツァンの頭目である輔教王などがおり、その內パクモドゥとディグンは元朝の時にそれぞれ烏思藏一三萬戶の一つで正三品であり、その地位はリンツァンとゴンジョのポンチェンより低いはずだ。しかし中原とチベットの驛路の滯りない交通を維持するのは、本來は烏思藏、朶甘思、朶思麻三道宣慰使司及びその屬下である諸萬戶自體の重要な職責であり、モンゴル＝元の邊地統治のうち最も重要なのは、第一に括戶、分封、置驛であって、それを基盤として設官分職し、統一された地方行政システムを建てたのである。元朝はチベット地域において二度全面的戶口調查を行い、二八箇所の大驛站を建て、あわせて各萬戶が驛站を支應し、鋪馬、首思を提供する規則を具體的に規定した。[71]そして地方行政において最高長官としての宣慰使・都元帥の重要な職責の一つも、また驛路の滯りない交通を確保することで、例えば烏思藏宣慰使であった拉堆洛（ラトェロ la stod lho）萬戶の軟奴汪術（ションヌワンチョク gZhon nu dbang phyug）は在任期間中まさにウ・ツァン地域の戶口調查をつかさどっており、そして「其の管內兵站饑戶を賑わ」したので、朝廷の賞賜を受けた。[72]元朝はドメーでは七大驛站を、ドカムでは九大驛站を設け、中國、チベット兩地間の交通と、兩地を行き來するチベット僧とモンゴルの使者の安全を保障した。ドメーに設けられた驛站はモ

ンゴル軍が雲南を征服するのにも功績があり、ドカムに設けられたガレ（Ga re）とゴペ（Go dpe）の二驛站はウ・ツァンとの交通において特別な意味があった。[73] 前述のように、リンツァンがあるデンコクは古來青海、カム、チベット間の交通の中軸であり、かつて文成公主が入藏した時にもここに留まっているし、[74] 元代そしてそれ以後カムよりチベットに入るには、多くは甘孜の絨垻岔からヤルン・ツァンポ沿いに遡り、浪多にて渡江し、デルゲの協慶寺、三岔河を經、俄溝沿いに遡り、デンコクの西で金沙江を渡って入藏している。[75]『漢藏史集』に據ると、

> 北方のモンゴルとチベットの境目の附近には、ヤクのような形の大岩があり、頭は東を向き、後ろには河があり、その河の名はツェキェツァンポ（Tshe skye gtsang po）といい、西に向かい流れている。前面にも河があり、名はディ河（Bi chu）【＝通天河】であって東方のデンマ地域の方へ流れている。河の北側はデンの陽、南側はデンの陰という。その大河の下流近くキェートゥプ（sKyed stubs）の地には、漢蒙間の大驛道が一本その間を通っており、その西は上手デン【マ】であり、ガパの地（lGa pa'i yul）と呼ばれる。デンマ河川の谷地でテボの地（Tre bo'i yul）と稱される地があり、ガ、デン【マ】、テボ三地（dGa' [lGa] ldan tre bo gsum）を統治する王族となった。

という。[76] 明らかにデンマは長江と瀾滄江上流が並流する地域で、今の青海玉樹の東部と四川の甘孜北部地方を包括しており、確かに元代の中國、チベット間交通の中心地である。[77] この故に、歷代、中國に入朝するチベットのラマはほとんどがこの地を經由して入藏しており、スパーリンク、タシ・ツェリン兩氏らの論文中に引用される歷代カルマパ活佛傳記にて、彼らが中國に入朝する途中にリンツァンを通りリンツァン王と交流したという記述がそれを證明する。史籍の記述の不完全さに妨げられ、元代にデンマにおいて設けられた驛站がリンツァンその地にあったのか否か確定する術はないが、しかしリンツァンの地理位置が當時の中國、チベット間交通にとって重要であるのを疑う必要は無い。そうとは言え、一度は中斷した中國、チベット間の驛路を明朝廷が改めて開通するというためだけに、リンツァンの頭目を贊善王に封じたと說明するには依然十分でないし、更には、歷代カルマパ活佛が中國に入朝する際にこの地を經、リンツァン王と交流する所

があったので、明成祖がその寵愛するカルマパ活佛の影響を受けてリンツァンを贊善王に封じたのだ、と斷ずることも出來ないのである。

五　『明實錄』に載るリンツァン贊善王とその他リンツァン支族の事蹟

『明實錄』永樂五年（一四〇七）三月丁卯條には、明朝廷が館覺（ゴンジョ）の頭目南葛監藏に命じて朶甘行都指揮使司都指揮使と爲した、とある。また、「南葛監藏、剌兀監藏の子なり。剌兀監藏洪武中率先して朝貢し、朶甘衞都指揮使を授く。其の卒するに及び、弟著思巴兒監藏を以って暫く其の職を領せしむ」と云う。著思巴兒監藏とはすなわち明により封授された初代リンツァン贊善王であり、南葛監藏とはその叔父の後をうけた第二代リンツァン贊善王である。ここで明らかとなるのは、リンツァンと明朝廷の交通が、決してスパーリンク氏が言うように永樂期（一四〇三―一四二四）に始まるのではなく、洪武朝（一三六八―一三九八）中期に始まったという事である。スパーリンク氏はその論文中にシトゥ・チューキジュンネー（*Si tu* Chos kyi 'byung gnas）撰『カルマパ活佛傳』中の五世カルマパ活佛大寶法王デシンシェクパ（De bzhin gshegs pa 一三八四―一四一五）傳を引用しているが、そこには一三九二年から一三九四年の間、幼小の大寶法王がドカム地域を遊歷した經歷を載せ、

> シャルカリン【ツァン】のポンチェンであるトゥォギェルツェン（Shar kha'i gling gi dpon chen Khro bo rgyal tshan）がお迎えし、ポンチェン、萬戶長、達魯花赤等の職にある地方頭目をはじめとする長（bon po [dpon po]）の人々に近住戒等の戒をお與えになり、それぞれの信受する法にて滿足させた。此の後、ゴンジョのポンチェンであるオエセル・ナムカーパのお迎えを受け、戊年三月上弦の日に【ゴンジョに】お越しになった。

とある。[78] この戊年とは、まさに木戊の年、つまり西曆一三九四年にあたる。[79] スパーリンク氏は、このリンツァンのポンチェン、トゥォギェルツェン（Khro bo rgyal mtshan）は『明實錄』中の初代贊善王著思巴兒監藏にあたると考える。しかし、

この Khro bo rgyal mtshan は明らかに、洪武中率先して朝貢し朶甘衛都指揮使に封じられた剌兀監藏を指すはずであって、彼は著思巴兒監藏の兄である。剌兀監藏の音寫は著思巴兒監藏と比べて Khro bo rgyal mtshan により近い。一三九四年は洪武二七年であり、「洪武中率先して朝貢」した剌兀監藏はおそらくまだ在位中である。弟の著思巴兒監藏が何時「暫く其職を領め」たのか史實に明證は無いが、彼が「靈藏灌頂國師」を受封したのは永樂四年である。此の外、スパーリンク氏は著思巴兒監藏をチベット語名 Chos dpal rgyal mtshan とも復元するが、實際にはそうではなく、正確にはダクパギェルツェン（Grags pa rgyal mtshan）となるはずである。『明實錄』永樂八年（一四一〇）正月、一〇年（一四一二）三月、一二年（一四一三）一二月の各條には靈藏贊善王の名を吉剌思巴監藏巴里藏卜としており[80]、よって、然るべき復元は Grags pa rgyal mtshan dpal bzang po でなければならない。

チベット語史料中でリンツァン一族が大、中、小の三支族（Gling che 'bring chung gsum）、あるいは上、中、下三支族（Gling khri gong 'og bar gsum）に分けられるのとまさに同じく[81]、『明實錄』中リンツァン贊善王とその他リンツァンの僧俗の頭領に關する記述が一樣に表明するのは、明朝廷と交流していたリンツァン一族もまた贊善王の支族だけではないということである。その上、リンツァン贊善王の支族が後のいわゆるリンツァン王、或いはリンツァン土司と決して同一の支族ではないことは、明白なのである。前述の如く、明に封じられた初代贊善王のダクパギェルツェンは、永樂四年（一四〇六）一二月に靈藏灌頂國師の封を受け、五年（一四〇七）三月に昇って贊善王となっている。これより以前、兄のトゥォギェルツェンに代わって暫く朶甘衛都指揮使の職を領している。贊善王一族はサキャ派と同樣に「叔甥相續」の繼承制度を採用していたのである。ダクパギェルツェンの贊善王の位は甥のナムカーギェルツェン・ペルサンポ（Nam mkha' rgyal mtshan dpal bzang po あるいは南葛監藏巴藏卜、喃葛堅參巴藏卜、または喃葛監藏、喃葛監剌など）に受け繼がれたのだが、彼は先ず永樂五年三月にダクパギュルツェンが贊善王に封じられた時にその職を襲い朶甘衛都指揮使に封じられ、後に洪熙元年（一四二五）初に贊善王の爵に襲封されている[82]。

意味深長なのはナムカーギェルツェンが『明實錄』中においてまた「ゴンジョの頭目」と稱されていることで、リンツァンとゴンジョ兩一族の間の連係が依然として極めて緊密であったことが分かる。正統六年（一四四一）、ナムカーギェルツェンは使いを遣わして自らが老いたことを奏し、長子ペルデンギェルツェン（dPal ldan rgyal mtshan あるいは班丹監剌、班丹監粲など）に贊善王を繼がせ、次子パククンサンポ（'Phags kun [=] bzang po 巴思恭藏卜）を都指揮とするのを欲したが、それに對し朝廷はペンデルギェルツェンに都指揮を、パククンサンポに指揮僉事をそれぞれ授けた。正統一〇年（一四四五）六月庚申、明朝廷は敕諭してペンデルギェルツェンに叔父のナムカーギェルツェンの位を襲わせ靈藏灌頂國師贊善王とした。しかし、少なくとも弘治九年（一四九六）において靈藏王「喃葛堅參巴藏卜」が依然存命しており、卒年は不詳である。弘治一六年（一五〇三）九月辛卯には、「西番故靈藏寺贊善王【ナムカーギェルツェン】の弟端竹堅咎番僧阿完等を遣わして來貢し、因りて襲職を請い、之に從う。[83]」、また正德二年（一五〇七）閏正月癸酉には、「故靈藏贊善王喃葛堅粲巴藏卜の弟端竹堅咎　兄の爵を襲うを乞い、之を許す。[84]」とある。端竹堅咎は嘉靖二二年（一五四三）一二月庚寅に死に、その甥である端岳堅咎が使いを遣わして襲職を乞い、朝廷の許可を得ている。[85]そして天啓六年（一六二六）七月丁酉になるまで、「陝西外夷靈藏贊善王端岳堅咎　使を遣わし方物を進貢し、賞賚例の如し。[86]」という。

『明史』巻三三一、西域三の贊善王條は基本的に『明實錄』からの引き寫しであるが、しかし引き寫された際に明らかな誤りが數多く加えられている。まず『明史』には「洪熙元年（一四二五）、【贊善王著思巴兒監藏】王卒、從子喃葛監藏襲」と云う。しかし『明實錄』によると、ナムカーギェルツェンはダクパギェルツェンの兄、トゥォギェルツェンの子であり、つまり贊善王の甥であって、從子ではない。ダクパギェルツェンの子は鎖南監藏であるはずで、彼は宣德元年（一四二六）三月に使いを遣わして入貢し、同年冬一〇月には朶甘都司都指揮使の誥命を賜っている。[87]次に、成化一八年（一四八二）の禮官の述べる入貢則例を引用した後、また「遂に喃葛堅粲巴藏卜を封じて贊善王と爲す」とする。『明實錄』成化十八年二月甲寅條を檢すると、『明史』が引用する禮官の發言と『明實錄』が記す禮部の奏とは內容が大體同じだが、

ナムカーギェルツェンを贊善王に再び封じたという記事は全く見えない。[88]『明史』は正統五年（一四四〇）、ナムカーギェルツェンが「奏して年老を稱し、長子班丹監剌を以って代えるを請う。帝其の請に從わず、而れども其の子に授けて都指揮使と爲す。」とする。だがこれは正統六年（一四四一）の出來事のはずである。『明實錄』正統六年四月辛卯條には、靈藏灌頂國師贊善王喃葛監藏及朶甘衞都指揮使司大小頭目人等への勅諭が全文にわたり引用されており、內容は『明史』の載せる所と符合する。[89]『明實錄』正統一〇年（一四四五）六月庚申條には、また靈藏灌頂國師贊善王喃葛監藏巴藏卜の姪班丹監剌への詔勅全文が引いてあり、ペルデンギェルツェンが叔父のナムカーギェルツェンに代わって靈藏灌頂國師贊善王となるのを許した事を詳述する。[90]

なお『明實錄』正統六年四月と正統一〇年六月兩條の記述はそれぞれペルデンギェルツェンがナムカーギェルツェンの長子、甥であるとして互いに矛盾しているが、[91]明朝廷が法王や教王に封じたのはみな僧であるという事實及びリンツァン一族の「叔甥相續」の慣例を考えると、ペルデンギェルツェンはナムカーギェルツェンの長子であるはずはなく、甥であるべきである。『明實錄』正統一〇年六月庚申條に載せる靈藏灌頂國師贊善王南葛監藏巴藏卜侄班丹監粲への勅書には、彼は「克承梵教、恪守毘奈」とあり、賜った禮品中にもまた「僧帽、袈裟、法器等件」があり、ペルデンギェルツェンが僧として贊善王の位を繼いだ事を明白に示していると思われる。しかし明らかに分かるのは、明の封じた贊善王は決してみなが僧人ではないし、彼らのうちには確實に親の後繼ぎでかつ朶甘衞都指揮使になり得たものがいたということである。前述したように、贊善王ダクパギェルツェンの子、鎖南監藏が朶甘都司都指揮使になったのはまさに一例である。だからあるいはペルデンギェルツェンはナムカーギェルツェンの子であったのかも知れない。ペルデンギェルツェンがナムカーギェルツェンの子か甥であったのか、いずれにせよとにかく彼は正統一〇年にナムカーギェルツェンに代わって贊善王となったのであり、『明實錄』の正統一三年（一四四八）、景泰二年（一四五一）、五年（一四五四）、成化一二年（一四七六）各條には、贊善王ペルデンギェルツェンが使を遣わして入貢したという明確な記載があるのである。

「靈威贊善王喃葛堅參巴藏卜」の名がまた『明實錄』弘治七年（一四九四）二月癸亥條にも現れるが、彼は遲くとも弘治一六年（一五〇三）には死んでおり、正德二年（一五〇七）その職を繼いで贊善王となったのはその弟、端竹堅昝であって、もはやペルデンギェルツェンの甥子ではなかった[92]のは、興味深い。贊善王ペルデンギェルツェン一族の繼承權もまたその叔父一族の手中に歸したのだ。さらに甚だしきは、『明實錄』成化三年（一四六七）七月丁亥條に、「靈藏の僧塔兒巴堅桑に命じて襲封し贊善王と爲す[93]。」とある。ここでの塔兒巴堅桑＝タルパギェルツェン（Thar pa rgyal mtshan）は明らかにナムカーギェルツェン、ペルデンギェルツェンという叔父甥の二贊善王と直接の親屬關係は全く無く、リンツァン一族中の別の一族、つまりリンツァン王あるいはリンツァン土司一族と稱するものであるが、彼らについては後述する。事實上、タルパギェルツェンが存命し贊善王であった時、明らかにドカムの地には同時に二人の、更には三人の贊善王が存在していたのである。『明實錄』成化一二年（一四七六）八月戊寅條には、「烏思藏贊善王班丹堅千」が使を遣わして入貢したという記述があるので[94]、タルパギェルツェンが贊善王となってから十年ほど後においても、ペルデンギェルツェンがなお贊善王であったのだ。なお『明實錄』弘治九年（一四九六）六月甲申條には、「西番贊善王 番僧劄掛星吉を遣わし、靈藏贊善王 番僧端竹等を遣わし來貢し、宴並びに綵段衣服等物を賜うこと例の如し[95]。」とある。ここでの西番贊善王はタルパギェルツェンをさすが、靈藏贊善王はペルデンギェルツェンではなく、ナムカーギェルツェンであるはずである。何故ならこの前兩年に、『明實錄』に「靈藏贊善王喃葛堅參巴藏卜」が使いを遣わし入貢したという記載が現れているからである。

この様に何人かの贊善王が並存するという狀況が出現した原因は、贊善王ペルデンギェルツェンと明朝廷の關係が惡化したところにある。『明實錄』景泰六年（一四五五）七月壬寅條には、灌頂國師贊善王ペルデンギェルツェンは「屢ば人臣を遣わし入貢し、貪茶坐船廩給を求むるも、未だ允賜を蒙らず」ので、「邊民惡を爲すも、臣以って禁阻し難[96]」いとして朝廷を脅そうとした、とある。景泰七年（一四五六）二月壬寅條にもまた、「贊善王班丹堅剌等私かに軍器を造り、虜寇と

交通して、陰謀未だ測らず」と載せる。贊善王ペルデンギェルツェンに對する不滿と防範から、明朝も「多封衆建」という常套手段を用いて、既に老齢をもって引退を表明した贊善王ナムカーギェルツェンを改めて招き出して再度任じたのみならず、かつまたリンツァン一族のうち別支に屬するタルパギェルツェンを同時に贊善王に封じ、贊善王ペルデンギェルツェンの勢力を分化、瓦解させようとしたのだ。

タシ・ツェリン氏の論文中に列擧されたリンツァンの王統（Gling gi rgyal rabs）は、明らかに後世に言うリンツァン土司家族の世系であり、先ほど述べたそれぞれの贊善王は、タルパギェルツェン以外はこの王統世系中には全くみえない。事實、彼らと贊善王は決して同一支族には屬さないことがわかる。最近までデンコクのリンツァン土司家に私藏されていた明宣德五年「敕諭朶甘衛行都指揮使司星吉兒監藏誥命」が、いわゆるリンツァン王またはリンツァン土司が明代朶甘衛行都司都指揮使の一族とその後裔であることを明らかにするし、[97] 明代における世系傳承もまた『明實錄』に詳しく見える。タシ・ツェリン氏のリスト中の第五十代リンツァン王「土司サンギェーギェルツェン」（*Du si* Sangs rgyas rgyal mtshan）は明らかに永樂四年二月に朶甘衛行都司都指揮使に封ぜられた、いわゆる箚思木の頭目である撒【撒】力加監藏または桑爾結監藏と稱するものである。宣德五年五月庚戌、撒力加監藏は年老にて致仕するを乞い、朝廷は許しその子星吉兒監藏をもって代えた。明朝廷はこの年に星吉兒監藏に誥命を賜い、彼の「職を替え朶甘行都指揮使司指揮使と爲」した。星吉兒監藏とは、チベット語センゲギェルツェン（Seng ge rgyal mtshan）の音譯で、タシ・ツェリン氏のリストではサンギェーギェルツェンの子、第五一代リンツァン王都【指揮】使 *Du si* Seng ge rgyal mtshan である。センゲギェルツェンには四人の子がいて、それぞれ第五二代リンツァン王都【指揮】使テンジンイェシェ（*Du si* bsTan 'dzin ye shes）、Chen po bdag drung、贊善王タルパギェルツェン（Tsan shing 'ang wang Thar pa rgyal mtshan）、萬戶長オェセルギェルツェン（*khri dpon* 'Od zer rgyal mtshan）である。その內のタルパギェルツェンは成化三年に「襲封して贊善王と爲す」というが、實際にはタルパギェルツェンは決して「襲封」したのではなく、リンツァン王の一族で贊善王に封じられたのはタルパギェル

ツェンただ一人だけなのである。なおタシ・ツェリン氏のリストのリンツァン世系では、都指揮使テンジンイェシェの子、カルマ・ギェルツェン（Karma rgyal mtshan）とその子、第五三代リンツァン土司ツェリン・タシ（Tshe ring bkra shing [shis]）もまた都【指揮】使の稱號を擁しているが、彼らの名は『明實錄』中には見えない。

リンツァン一族が明代において任じた職位のうち最も重要なのは確かに朶甘衞行都指揮使であり、これは疑いなく朶甘衞の最高行政長官で、その地位はおよそ元代の朶甘思宣慰使都元帥と同じである。明代の職官制度をみると、行都指揮使は朝廷の二品官であり、「都司は一方の軍政を掌り、各の其の衞所を率いて以て五府に隷し、兵部に聽（したが）う。」とある。行都指揮使司の設官は都指揮使司と同じで、行都指揮使一人、正二品、都指揮同知二人、從二品、都指揮僉事四人、正三品を設ける。(98) 烏思藏、朶甘衞指揮使司は初め洪武六年二月に置かれ、洪武七年七月「彼方は地廣く民稠く、重鎭を立て之を治めずんば、何を以て恩威を宣佈せんと慮」り、よって「命じて西安行都指揮使司を河州に於いて立て、其の朶甘、烏思藏も亦た陞して行都指揮使司と爲し、銀印を頒授」した。(99) この西安、朶甘、烏思藏三つの行都指揮使司の職能、地位は明らかに元代に設けた西番三道宣慰使司とおおよそ似ており、異なるのは、元代西番三道宣慰司は直接に中央の宣政院に直屬していたが、明代の朶甘、烏思藏二衞行都指揮使司は實際には西安行都指揮使司つまり陝西都司の節制を受け、ここにチベット地域の特別行政區としての地位は元代に比べ一段弱まったことがわかる。元代の西番三道宣慰司がなお一行省の地位に相當すると考えられるならば、なおのこと明代の三衞行都指揮使司は陝西、四川都司【行省】轄下の領土の一部分であると考えられるが、『明實錄』中に常に「陝西河州」、「四川烏思藏」などの類の表現が見えることがすなわちその證例である。これと相應して、リンツァン贊善王もまた「烏思藏靈藏贊善王」、「陝西洮州靈藏贊善王」、「陝西外夷靈藏贊善王」、「西番贊善王」等と様々に稱されている。

贊善王という位が決してリンツァン一族中の一枝の獨占物ではなく、同時に幾つか異なる支系の贊善王が存在していたのと同じく、朶甘衞行都指揮使という職もまたリンツァン土司一族のみが任じたのではなく、また同時に何人もの、リン

ツァン一族出身の異なる支系の成員が任じるという現象が出現した。朶甘衛が初め設けられた時、鎮南兀卽爾が指揮同知となっただけで、まだ都指揮使はない。『明實錄』中最も早くに言及される朶甘衛都指揮使は、初代リンツァン贊善王ダクパギェルツェンの兄、トゥォギェルツェンであり、彼は洪武中に率先して朝貢し朶甘衛都指揮使の職を授けられたのである。その後弟、ダクパギェルツェンが暫らくその職を代理した。永樂四年二月壬寅、ダクパギェルツェンが靈藏灌頂國師に封じられると同時に、箚思木の頭目、つまりリンツァン王サンギェーギェルツェンに朶甘衛行都司都指揮使が授けられた。次の年、またトゥォギェルツェンの子、ゴンジョの頭目ナムカーギェルツェン及び阿層領占に命じて共に朶甘行都指揮使司都指揮使と爲し、阿卓南葛領占とリンツァンの頭目鎖南斡層を都指揮僉事とした。この時、サンギェーギェルツェンもまたやはり都指揮使の位にあったはずである。サンギェーギェルツェンの子、センゲギェルツェンは宣德五年に朶甘行都指揮使の位を繼ぎ、そして正統六年に贊善王ナムカーギェルツェンが老齡を理由に息子をもって位を繼がせるのを請うた時、明朝廷はまたその二子に都指揮と都指揮僉事の職を授けた。しかし宣德、正統年間には、リンツァン一族中の別支族にてもまた阿努、軟努巴父子が相次いで朶甘衛都指揮となるということがあった。『明實錄』宣德五年（一四三〇）八月辛巳條には朶甘衛故指揮使阿奴とその子、軟努巴に言及する。そして正統五年三月乙卯條にもまた靈藏指揮軟奴巴が言及される。朶甘衛都指揮という職もまたこの一家にて世襲されているのが分かる。明代の慣例では、行都指揮使司は都指揮使一人のみを設けるのであって、「又都衛は方面を節制し、職甚だ重きに係るを以って、朝廷の選擇陞調に從い、世襲を許さず」（『明史』卷七六、職官志五）のである。だから「凡そ都司は並びに流官、或いは世官を得、歲ごとに撫・按其の賢否を察し、五歲にて軍・政を考選して之を廢置」（同前）する。しかし、朶甘衛行都指揮使司には同時に複數の都指揮使が出現しただけでなく、行都指揮使の職もまたリンツァン王一族の別支系にて世襲されていたのだ。前述の明宣德五年皇帝敕諭朶甘衛行都指揮使司星吉兒監藏襲其父職爲都指揮誥命、および阿努と軟努巴父子が相次いで都指揮となったのがまさしく證例である。これは明制の常例とは違っており、見たところ朶甘衛都指揮使司は元朝の三道宣慰司と同樣に特

別地域のみが所有する特權を多く享有していたのである。朶甘衞行都指揮司は朶甘思宣慰司、朶甘思、朶甘隴答、朶甘丹、朶甘倉溏、朶甘川、磨兒勘の六招討司、沙兒可、乃竹、羅思端、列思麻の四萬戶府及び一七の千戶所を管轄しており、[100]それが明代におけるドカムの最高地方行政長官の地位であったことは疑うべくも無いのだ。

餘　論

明代に封じられた法王、教王、國師、西天佛子の號は、「悉く給うに印誥を以ってし、之に世襲を許し、且つ歲ごとに一たび朝貢せしむ」とはいえ、それらほとんどがただ諸衞の僧、土官に與えられた尊號にすぎなく、それが決して正式に明代の職官制度に入ったことは無く、嚴密に言えば彼らは朝廷の命官では無かったのである。だがはっきりしているのは、これら法王、教王及び灌頂大國師が往往にして、朝廷の命官には及びようの無い地位と權力を享有していたことである。具體的に贊善王について言えば、その地位はまた明らかに正二品の朶甘衞行都指揮使より高いようだ。實際初代贊善王ダクパギェルツェンと二代目ナムカーギェルツェンは均しく朶甘行都指揮使より贊善王の位に昇任しており、前述の通りナムカーギェルツェンは長子に王爵を繼がせようとして明朝廷の拒絶に遇うが、その子が都指揮に封ぜられるのは准されている。明の詔令にもまた「敕諭靈藏灌頂國師贊善王喃葛監藏及朶甘衞都指揮使司大小頭目人等曰」と稱し、『明實錄』弘治七年二月癸亥條にも「贊善王下都督指揮公哈堅參巴藏卜」とあり、[101]これはすべて贊善王の地位が朶甘行都指揮使よりも高かったことを物語る。贊善王は治內の僧、土官のため、朝廷に官號、封賞を奏請しえた。贊善王と朶甘衞行都指揮使はそれぞれ直接に使を遣わして定期的に明朝廷に進貢し、この他にもリンツァン一族その他支系の僧、頭領もまた直接に明朝廷に進貢し、單獨に封賞を得ることが出來た。リンツァン贊善王の下の僧で國師の稱號を得た者は本當に多く、明朝廷もまた誥命を分賜している。例えば正統一三年（一四四八）五月丁酉には「禮部奏すらく、烏思藏灌頂國師贊善王人を遣わし奏して番僧綽吉堅粲（Chos kyi rgyal mtshan）を保して灌頂弘慈妙覺大國師と爲さんとす」[102]、また成化一〇年（一四七

四）一二月乙酉には、「靈藏贊善王の遣わし進貢する所の禪師桑兒結藏卜（Sangs rgyas bzang po）を陞して國師と爲し、並びに誥命印信を給う」[103]、といい、嘉靖三四年（一五五五）六月二九日には「番僧管著堅咎の靈藏贊善王下、已故灌頂國師結瓦藏の侄爲る有り、誥命を受け、乃叔灌頂淨修廣慧國師の職を襲うを命ず」[104]とある。周知の通り、明朝はチベットにおいて「多封衆建」政策を採用し、「初め、太祖西番の地廣く人獷悍なるを以って、其の勢を分け其の力を殺し、邊患を爲さざらしめんと欲し、故に來れば輒ち官を授」（『明史』巻三三一、西域傳三）けた。當時の西番族種は「大きは數千人、少きは數百、亦た歲ごとに一たび奉貢するを許し、優するに宴賚を以てす」（『明史』巻三三〇、西域傳二）とあり、そしてその結果必然的に、「西番の勢い益す分かれ、其の力益す弱く、西陲患益す寡く」なった。「成祖に迨び、益す法王及び大國師、西天佛子等を封じ、轉相化導して以て共に中國を尊ばしめ、以て故に西陲宴然たり、終に明世番寇の患無」（同前）かった。明代治藏の慣例をみると、「國家西番を撫有するに、其の習俗に因りて其の族屬を分け、其の渠魁を官し、給するに金牌を以てし、而して又土官才能者を選び、授くるに重職を以てし、以て之を鎭撫す。是を以て數十年間番夷效順し、西陲晏然たり」[105]とある。

具體的にリンツァン一族をみると、贊善王支族はまさに當一族の「渠魁」であるからこそ王に封ぜられたのであり、一方朶甘衞都指揮使を占めた支族とは、選ばれるを得た「土官才能者」であり、『明實錄』では朶甘衞都指揮使サンギェーギェルツェンを稱して箚思木の頭目とする。このような多封衆建政策により、元來強盛であった西番族はだんだんと分化、解體されてその力を失っていき、最後には取るに足らぬ小土司になってしまった。清末、改土歸流の時代に至り、林葱土司は明代朶甘衞都指揮使の一族であったはずが、淪落して白利土司轄下の一土百戶になってしまったことは前述したが、その衰亡の歷史を追及するならばやはり明代の多封衆建政策に起源があるのである。なおリンツァン贊善王支族の明以後の動向については、更なる研究が必要である。

今明代中藏關係史を論ずるものは一般に明代における中藏間の往來は主として明代早期、特に永樂期に發生したと考え

る。實際、明代中後期の中藏間の交通は前期と比較して増えこそすれ減ってはいない。明代の中藏交通の主要項目である朝貢について言えば、明代後期に來朝し入貢した番僧の數は、遙かに明初を超える。『明實錄』成化元年（一四六五）九月戊辰條には、

禮部奏すらく、宣德（一四二六―一四三五）、正統（一四三六―一四四九）間番僧入貢三、四十餘人に過ぎず、景泰（一四五〇―一四五七）間に起數漸く多く、然れども亦た三百人を過ぎず。天順（一四五七―一四六四）間遂に二、三千人に至り、今に及びては前後絡繹して絶えず、賞賜は貲られず、而して後に來るもの又量るべからず。

とある。(106)『明實錄』中のリンツァン贊善王及びリンツァン一族の支系と明朝廷のやり取りに關する記載を通覽すれば、リンツァンと明朝廷の往來が洪武中に始まって天啓六年（一六二六）に終わり、ほとんど明王朝と終始したことがわかる。二者間往來の內容もまた主には朝貢と封賞であり、リンツァン一族の各支系が絶え間なく使者を朝廷に遣わし進貢し、封授、賞賜を請い求めるだけでなく、朝廷もまた常に使臣をリンツァンに遣わし撫諭給賜した。明朝廷は來朝して入貢する者に對してそれぞれ十分に手厚い賞賜を與えたので、番王はしばしば使臣を入朝させて明朝の國家財政を支出超過にさせ、「烏思藏贊善、闡教、闡化、輔教四王は三年一貢、王ごとに使を遣わすこと百人、百五十人を過ぎず」と規定せざるを得なくなった。しかし諸法王、教王が往往にしてその規定を遵守しなかったのは、『明實錄』成化一八年二月甲寅條に

禮部奏すらく、烏思藏番王進貢、期を定るに必ず三年を以ってし、數を定るに僧一百五十を過ぎず。近ごろ贊善王連ねて二次已に僧四百一十三人を差し、今又封を請い襲を請うを以って、一千五百五十七人を差すは、倶に倒〔例〕に非ず、宜しく盡く阻回すべし

とある如くである。(107)使者の數の多さは驚くべきものである。明一代にあって、リンツァンと明朝廷の關係はかなり密接であったが、景泰年間のペルデンギェルツェンの時に危機が生じ、ペルデンギェルツェン等が「私かに軍器を造り、虜寇と交通して、陰謀未だ測らず」と言う者もあり、その理由は「屢ば人臣を遣わして入貢し、食茶、坐船、廩給を求むるも、

未だ允賜を蒙らず」というものであった。明朝廷は一方では「陝西、四川鎮總兵等官に移文し、務めて邊備を整飭し、其の奸宄を防ぐを要め」て、また一方では「仍お敕を賜いて禍福を開諭し、其をして禮法を安守せしめ、小人誘惑して非を爲すを聽すこと毋からしめ」、かつ別にリンツァン一族の他支系の一員を贊善王に封じ、その力を分斷した。だから、明末には、リンツァンは邊患を成さなかったのである。[108] 明朝廷の番王に對するこのような惜しみない封賞、賞賜は、當然ながら喜んで布施しようなどという氣持からでたものではなく、その明確な政治目的があり、封賞を得た番王が邊境を守護することを狙ったのであって、いわゆる「廣く佛教を布し、群迷を化導し、尓一方の人をして、咸な爲善の心を起し、永く太平福を享けしむ」[109]のである。封じられた番王は「敬して臣職を修め、番夷を撫化し、以て報稱を圖」[110]らなければいけない外に、また朝廷の爲に奉仕しなければならず、例えば「復た驛站を置き、以て西域の使を通」[111]じ、かつ行き來する朝廷の使節團のため「道里費を給し、且つ人を遣わし防護」[112]した。リンツァン一族が贊善王に封じられたのは、明朝がその勢力によって中藏間の驛路を再建させようとしたためではないが、リンツァン贊善王及び朶甘衞都指揮使が確實に、驛站のために奉仕し、驛路の滯りなき交通を保障するという義務を有していたのである。

註

（1）本稿は筆者の研究課題『明代漢藏關係與中原之藏傳佛教』(Sino-Tibetan Relationships and Tibetan Buddhism in China during the Ming Period (1368-1644)) における成果の一部であり、當課題はネパール、ルンビニ國際研究院 (Lumbini International Research Institute, Nepal) の贊助を受けている。

（2）『東洋史研究』第二一巻第三號、第二二巻第二號、同巻第四號。佐藤長『中世チベット史研究』(京都：同朋舍一九八六) 一七三―二四八頁に再錄。

（3）エリオット・スパーリンク Elliot Sperling, "Ming Ch'eng-Tsu and the monk officials of Gling-Tshang and Gon-Gyo", Lawrence Epstein (ed), *Reflections on Tibetan Culture* (Lewiston 1989), pp. 75-90.

（4）タシ・ツェリン Tashi Tsering, "Gling tshang rgyal rabs snying bsdus sngon 'gro'i lam ston zhes bya ba dge (History of the Gling-tshang Principality of

Khams: A Preliminary Study)", Ihara Shoren and Yamaguchi Zuiho (ed.), *Tibetan Studies, Proceedings of the 5th Seminar of the International Association for Tibetan Studies* (Naritasan Shinshoji 1992), vol. 2, pp. 793-822.

（5）タシ・ツェリン前掲論文八〇二頁。

（6）西田龍雄『西番館譯語の研究：チベット言語學序說』（京都：松香堂　一九七〇）には、明代西番館が呈したリンツァン贊善王の來文二通、西番館來文第二四號贊善王臣遠丹藏卜謹奏（一四六—一四七頁）、西番館來文第二七號靈藏贊善王下剌麻臣端竹也舍謹奏（一四九—一五〇頁）を收錄する。別に、明宣德五年（一四三〇）の「皇帝勅諭朶甘衞行都指揮使司星吉兒監藏」が、任乃強、澤旺奪吉「〝朶甘思〟考略」『中國藏學』一九八五年第一期一四一頁にある。明嘉靖三十四年六月二十九日靈藏贊善王下灌頂國師管著堅咎に下された誥命が、ペーター・シュヴィーガー Peter Schwieger, "A Document of Chinese Diplomatic Relations with East Tibet during the Ming Dynasty"（未刊）にある。

（7）『明史』卷三三一、西域傳三。

（8）R. A. Stein, *Les Tribus Anciennes des Marches Sino-Tibetaines, Légendes, Classifications et Histoire* (Paris: Presses Universitaires des France 1967) p. 47.

（9）格勒『論藏族文化的起源形成與周圍民族的關係』（廣州：中山大學出版社　一九八八）二九—三〇頁。

（10）劉贊廷『鄧科縣誌略』西藏社會科學院西藏學漢文文獻編輯室編輯『西藏地方誌資料集成』第三集（北京：中國藏學出版社　二〇〇一）一六七—一六八頁。

（11）『四川通志』卷九七、九八。

（12）吳豐培編『趙爾豐川邊奏牘』（成都：四川民族出版社　一九八四）三二〇—三二一頁。

（13）同書二六〇—二六一頁。

（14）傅嵩炑撰、寥祖桂點校『西康建省記』中國藏學史料叢刊第一輯（北京：中國藏學出版社　一九八八）卷上、一五頁。

（15）吳豐培前揭書二六一頁。

（16）傅嵩炑前揭書一五頁。

（17）『西藏地方誌資料集成』第三集一七七頁。

（18）前揭書一七八—一八〇頁。

（19）前揭書一六九頁。

（20）吐蕃期のツェンポ・ティドゥーソン khri 'dus srong（= 'dus srong mang po rje rlung nam 六七六—七〇四）の時、リンの地にティツェ（khri rtse）という寺廟が建てられ、ツェンポ本人も七〇一—七〇三年にこの地に駐している。これは七世紀末吐蕃に既に佛教が傳播していた證據の一つである。ただしこれ以外、更なるリンツァンについての消息は無い。cf. Pasang Wandu and Hildegard Diemberger, *dBa' bzhed, The Royal Narrative Concerning the Bringing of the Buddha's Doctorine to Tibet, Translation and Facsimile Edition of the Tibetan Text* (Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften 2000) p. 33 n. 53.

(21) タクツァンゾンパ・ペンジョルサンポ（sTag tshang rdzong pa dPal 'byor bzang po）『漢藏史集』*rGya bod kyi yig tshang mkhas pa dga' byed chen mo 'dzam gling gsal ba'i me long*（成都：四川民族出版社　一九八五）三三〇頁「nyi shu rtsa bdun dbus gtsang dpon chen gyis/ bla ma'i bka' dang rgyal po'i lung bzhin du/ khrims gnyis bskyang nas rgyal khams bde ba dang/ bstan pa'i gsal byed gyur pa'ang byung bar gnang/ de mthun mdo stod gon gyo [go 'jo] mdo smad gling chang [tshang] ste/ chol kha re re la dpon chen re yod lo」°

(22) 同書三二七三頁「dPon chen zhes pa ni bla ma'i nye gnas la/ bod kyis/ che ming btags par 'dug cing/ chol kha zhes pa dang/ hor rgyal pos/ bla ma la/ dbang yon du phul ba'i mdo stod smad/ dbus gtsang dang bcas pa la ming btags par bdu/」°

(23) 同書三二七—三二七九頁°

(24) 同書三二七八頁「dBang yon bar ma la/ chol kha gsum phul ba'i ja yul mnga' ris gung thang man sog la skya bo de/ dam pa chos kyi chol kha/ sog la skya bo man/ rma chu gug [khug] pa yan/ mgo nag mi'i chol kha/ rma chu khug pa man/ rgya mchod rten dkar po yan/ dud 'gro rta'i chol kha dang gsum po de/ mi rta chos gsum gyi 'bul ba'i lugs su byas nas/ phul bar 'dug cing/ chol kha re re la/ dpon chen re re/ rgyal po yon mchod bka' gros su bstun nas bskos mdzad 'dug」°

(25) P Pelliot, "Notes sur le "Turkestan" de M. W. Barthold", *T'oung pao*, vol. xxvii (1930) pp. 18-20.

(26) 『永樂大典』巻二九四二二ˊ「經世大典・站赤」°

(27) 『元史』巻三〇ˊ泰定帝本紀二ˊ泰定三年五月乙卯條°

(28) 沈衛榮「元朝中央政府對西藏的統治」『歷史研究』一九八八年第三期ˊ一四四—一四五頁參照°

(29) ポンチェンの實際の地位に關する檢討はˊ陳得芝「再論烏思藏"本欽"」ˊ蕭啓慶編『蒙元的歷史與文化：蒙元史學術研討會論文集』（臺北：學生書局　二〇〇〇）上册二一三—二四四頁所收に詳しい。

(30) 『元史』巻八七ˊ百官志三°

(31) 朱德潤『存復齋文集』巻四「行宣政院副使送行詩序」°

(32) 『元史』巻九二ˊ百官志七°

(33) 『漢藏史集』二七二頁「bod chol kha [m!] gsum gyis zhing chig ma longs nas/ bla ma'i bzhugs gnas dang/ sangs rgyas kyi bstan pa dar ba'i sa phyogs yin pas/ zhing gcig tu bgrangs pas/ bcu gcig yin zer ro/」°

(34) 西番三道宣慰司とその屬下の機關の設置については『元史』巻八七ˊ百官志三を見よ°また陳得芝「元代烏思藏宣慰司的設置年代」『元史及北方民族史研究集刊』第八期（南京　一九八四）一一八頁を參照°

(35) 『元史』巻八七ˊ百官志三°

(36) L. Petech, "sTon-tshul: The Rise of Sa-skya Paramountcy in Khams", Ernst Steinkellner (ed.). *Tibetan History and Language: Studies dedicated to Uray Geza on his*

seventieth birthday (Wien: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien 1991) pp. 419-420 參照。葉仙爾の生涯については Herbert Franke, "Qubilai Khans Militärbefehlshaber in Osttibet: Bemerkungen zur Biographie von Yeh-hsien-nai", Ernst Steinkellner (ed.), *op. cit.* pp. 173-184 參照。

(37) 陳得芝前揭一九八四年論文。仁慶扎西「元代經營甘青藏區概述」『仁慶扎西藏學研究文集』(天津：天津古籍出版社 一九八九) 六三一七三頁參照。

(38) 『漢藏史集』一七五頁。

(39) 浦文成主編『甘青藏傳佛教寺院』(西寧：青海人民出版社 一九九〇) 一一〇—一一三頁參照。

(40) 清・梁份著、趙盛世、王子貞、陳希庚校注『秦邊紀略』(西寧：青海人民出版社 一九八七) 卷二、河州 (衛) 條、三四頁。

(41) 『漢藏史集』三一八頁。

(42) 同書四一一頁。

(43) 同書四三三頁。

(44) 同書四三三頁。

(45) 『明實錄』四、「太祖實錄」卷九一 (中央研究院歷史語言研究所校印本)、三一四頁 (二五九五—六)。

(46) L. Petech, *Central Tibet and the Mongols, the Yuän-Sa-skya Period of Tibetan History* (Rome: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente 1990) p. 14 n. 33, p. 63 n. 104.

(47) 『漢藏史集』四〇一頁。

(48) 四世カルマ活佛ロルペー・ドルジェ (Rol pa'i rdo rje) は一三五八年にテン・ロンタン ('Dan klong thang) を通った時、リンツァンのポンチェンである都元帥 Cha'o tha'o と遇っている。「de nas【sa pho khyi (＝1358)】zla ba bcu gnyis pa'i tshe gcig la 'dan klong thang du phebs/ gling gi dpon chen du dben sha cha'o tha'o sogs kyis mjal」(シトゥ・パンチェンチョーキジュンネー Si tu PaN chen Chos kyi 'byung gnas, 『歷代カルマ派活佛傳』 *sGrub Karma Kam tshang brgyud pa rin po che'i rnam par thar pa rab 'byams nor bu zla ba chu shel gyi phreng ba* (New Delhi 一九七二) 一七八頁)。Cha'o tha'o とは、元末のサキャポンチェン dPal bum のことである。ペテック前揭書一三三頁注一八九參照。Cha'o tha'o は人名ではなく、漢語の官名「招討」の音譯である。dPal 'bum はリンツァンのポンチェン、サキャのポンチェンを任じるより以前に招討を任じていた。

(49) 『元史』卷二〇二、釋老傳。仁慶扎西「元朝帝師制度述略」(仁慶扎西前揭書五一三四頁所收)。

(50) 格勒『甘孜藏族自治州史話』(成都：四川民族出版社 一九八四) 六八、七八、八三頁。

(51) 『漢藏史集』四〇〇—四〇一頁。

(52) タイシトゥ・チャンチュプギェルツィン (Ta'i si tu Byang chub rgyal mtshan) 著、チャプペルツィテン (Chab spel Tshe brtan) 編、『明氏家族史』 *rLangs kyi*

po ti bse ru（拉薩：西藏人民出版社　一九八六）三五七頁。リンポチェントンツルに關してはペテック前掲一九九一年論文四一七—四二二頁參照。

（53）五世カルマ派活佛の傳記と『賢者の喜宴』（書誌は註(78)參照）中には「シャルカのリン【ツァン】のポンチェンであるトゥォギェルツェン（khro bo rgyal mtshan）」と言及される。タシ・ツェリン前掲論文一一三—一一四頁參照。

（54）仁慶扎西「騰巴碑與騰巴」（仁慶扎西前掲書一一三—一一四頁所收）および Hebert Franke, "Tan-pa, Tibetan Lama at the court of the Great Khans" *Orientalia Venetiana*, Volume in onore di Lionello Lanciotti, ed. Mario Sabattini (Firenze: Leo S. Olschki Editore 1984) pp. 157-180, Elliot Sperling, "Some remarks on sGa A-gnyan Dam-pa and the origins of the Hor-pa lineage of the dKar-mdzes Region", *Tibetan history and language: Studies dedicated to Uray Geza on his seventeeth birthday* (Wien 1991) pp. 455-456.

（55）沈衛榮「神通・妖術與賦髦：論元代文人筆下的番僧形象」（未刊）。

（56）浦文成前掲書一一七—一一八〇頁。

（57）『漢藏史集』三七五頁「lDan stod lga'i yul du/ lga ang snyen dam pa zer ba'i 'byor ldan/ dkar phyogs la mos pa gcig byung pa de nyid kyi/ lga ldan tre bo'i sa khongs su/ lha khang rgya phigs khyung mgo can brgya brtsa brgyad/ lha khang re'i nang du/ rten ngo mtshor can dang/ bka' 'gyur ro cog cha tshang ma re bzhengs pa'i drung du/ dkar mo khor yug/ mchod pa rnam lnga'i rgyun ma chad pa'i dge rgyun btsugs pa la sogs cho 'phreng phun sum tshogs pa'i 'phrin las rgya chen por mdzad 'dug/ de'i dbon sras kyi brgyud pa/ ldan ma dbon po/ bzang po rgyal mtshan/ yab sras/ 'khor bcas ga' zung gis/ dbus gtsang dag pa'i zhing khams dang/ khyad par dpal ldan sa skya pa'i spyan sngar 'byon bzhed nas/」。

（58）ジクメー・タクパ（'Jigs med grags pa）『ギャンツェ法王傳』*rGyal rtse chos rgyal gyi rnam par thar pa dad pa'i lo thog dngos grub kyi char 'bebs zhes bya ba bzhugs so* (Lhasa: Bod ljongs mi dmang dpe skrun khang 1987) 四頁「de yang sngon mdo khams stod du dgra rgod 'dong btsan zhes pa stag lpags brgya'i thul ba gyon zhing/ dred la sbar 'dzin byed pa'i khrom ge sar rgyal po'i mag pa byas pa'i bu tsha brgyud」。

（59）『朗氏家族史』三七五頁「Se chen rgyal po dang/ bla ma 'phags pas bdag mdzad pa la brten nas/ mdo khams sgang go bdag por gyur dus/ rang gi nye ring dang phyogs cha ma byas/ gong ma yon mchod kyi dgongs pa bzhin spyi'i bdag po byas/ khong rang gi gon gyo [jo] la/ srwon wi si dang/ khri dpon stong dpon tsam yang ma bskos par/ gling tshang gi mgon bton nas/ gling la khri dpon dang stong dpon bskos/」。

(60) 『朗氏家族史』三五九—三六〇頁。

(61) 『ギャンツェ法王傳』七頁。またタシ・ツェリン前掲論文八〇三頁參照。

(62) 格勒氏は、「デルゲ、デンコク一帶での最大の勢力集團は傳説にあるリン國（gling）である。リン國は吐蕃王朝が崩壊した後に起こった部落集團である。それはまず道孚にいた打舍王國を滅ぼし、進んで北路大部を占領し、城をデンコクのリンツァン地方に設けて自ら「嶺班波」[Gling dpon po?]と稱しており、實質一つの部落集團であった。後に衛藏地域のサキャ法王バクパが元朝皇帝の詔に應じるときにリン國を通れば、リン國は熱心に接待し、その部落の酋長は「嶺甲爾布」[Gling rgyal po]に封じられた」、「彼らが「白嶺國」の後裔である以上、またチベット化した古えの白蘭羌なのである。」と言う。格勒前掲一九八八年書三九四—三九五頁を見よ。また、同書三九一—三九八頁も參照。格勒氏は同書にて『リンツァン土司世系』*Gling tshang gi rgyal rabs* なる書に言及するが、具體的な出處は明らかにされていない。筆者はかつて書面にて其の書につき尋ねたが、現在その所在は不明との事であった。

(63) 『河州志』巻二。『秦邊紀略』巻一、河州（衛）條、三九頁。

(64) 『明實錄』一〇二「神宗實錄」巻一三二、五葉（二四三九頁）。

(65) 『明實錄』正統五年（一四四〇）三月乙卯條（同書二五「英宗實錄」巻六五、五葉、一二四五—六）に、「勅鎭守河州衛都指揮同知劉永曰、得奏言烏思藏等處番使已遣人護送回還、至西寧訹木地方、散於丹的寺等族寄住。內靈藏指揮軟奴巴【＝前述の朶甘衛故指揮使阿奴子若奴八】先居河州時嘗娶妻本衛、因懷眷戀、窺黃河水凍、復潛逃來、又誘溫速里民王搔兒言往陝西都司告給俸糧。慮其糾合諸番、將爲邊患。勅至、爾等卽用心體覆。若番使仍在彼處安分守己、聽其暫住。俟道通卽遣之回。並審軟奴巴若止因戀妻逃來、亦可就彼安插。彼處不可卽同其妻差人送京。如有窒礙、亦量度事情、計議停當、具奏處置。」とある。ここから見るに、この同名の兩族は何か深い關係があるようだ。

(66) スパーリンク前掲一九八九年論文八〇頁。

(67) 『明實錄』三「太祖實錄」巻六〇、四葉（一一七三）。

(68) 『明實錄』四「太祖實錄」巻七九、一葉（一四三七）。

(69) 『明實錄』四「太祖實錄」巻九一、三葉（一五九五）、洪武七年已卯條「…茲命立西安行都指揮使司於河州、其朶甘、烏思藏亦陞爲行都指揮使司、頒授銀印、仍賜各官衣物。」。

(70) 例えば明朝の職官制度中に元來司徒の封號は無いが、しかし永樂一一年二月に、元朝の例にならい、「授鎭巴頭目剌督肖、掌巴頭目扎巴、八兒土官鎭南巴、仰思都巴頭目公葛巴等俱爲司徒」とある。沈衛榮「明封司徒鎭巴頭目剌督肖考」『故宮學術季刊』第一七巻第一期（一九九九）一〇三—一三六頁參照。

(71) 詳しくは『漢藏史集』二九六—三〇四頁。またペテック前掲書六一—六八頁も參照。『漢藏史集』には、ウ・ツァ

ン、ドメー、ドカム三地に合わせて二七ヶ所の驛站があるとするが、『經世大典・站赤』には「烏思藏等除小站七所勿論、其大站二十八處。」と記す。チベット、漢語の記述には一站の差があるとはいえ、『經世大典』中にリスト化された後藏四大驛站の名稱は『漢藏史集』二七五—二七六頁中にリスト化されたところと一一對應する。陳慶英、祝啓源、「元代西藏地方驛站考釋」『西藏民族學院學報』一九八五年第四期を參照。

(72) 『元史』卷一五、世祖本紀。沈衛榮前揭一九九九年論文一一一頁參照。

(73) 詳しくは『漢藏史集』二七六—二七七頁參照。

(74) サキャパ・ソナムギェルツェン（Sa skya pa bSod nams rgyal mtshan）『西藏王統記』*rGyal rabs gsal ba'i me long*（北京：民族出版社 一九八一）一一二頁。「De'i bar la rgya mo bza' la sogs pa'i bod blon rnams kyis ldan ma brag rtsar phebs nas/ brag la byams pa khru bdun pa gcig dang/ bzang spyod gnyis brkos mar bzhengs」。

(75) 任乃強、澤旺奪吉前揭論文一三六—一四六頁、特に一四一頁參照。

(76) 『漢藏史集』三七二頁。

(77) 陳慶英『元朝帝師八思巴』（北京：中國藏學出版社 一九九二）一〇三頁參照。

(78) 「Shar kha'i gling gi dpon chen khro bo rgyal mtshan pas gdan drangs/ dpon chen/ khri dpon/ da ra kha che ste las ka 'dzin pa'i sde bdag rnams kyis thog drangs bon po la sogs pa'i skye bo du ma la bsnyen gnas la sogs pa'i sdom pa gnang zhing rang rang gi mos pa'i chos kyi tshim par mdzad nas/ go jo'i dpon chen 'od zer nam mkha' pas gdan grangs nas khyi lo zla ba gsum pa'i yar tshes la phyag phebs」。タシ・ツェリン前揭論文八〇五頁より轉引した。類似の記述はまたパヲー・ツクラクテンワdPa' bo gtsug lag phreng ba,『賢者の喜宴』*Dam pa'i chos kyi 'khor lo bsgyur ba rnams kyi byung ba gsal bar byed pa mkhas pa'i dga' ston*（北京：民族出版社 一九八六）下册、一〇〇〇—一〇〇一頁に見える。

(79) タシ・ツェリンは戊年を木戌の年と正確に計算しているが、その年を一三七四年とするのは、一三九四年の誤植のはずで、何故なら大寶法王は一三八四年に生まれているからである。

(80) 『明實錄』一二「太宗實錄」卷一〇〇、三葉（一三〇七）。同書一四「太宗實錄」卷一四七、一—二葉（一三二一—二）。同書一四卷一五六、一葉（一三六九）。

(81) タシ・ツェリン前揭論文七九八、八一一頁參照。

(82) 『明史』卷三三一、西域傳三、烏思藏、には、ダクパギェルツェンは洪熙元年に死に、よってその甥のナムカーギェルツェンは爵を繼いで贊善王となった、とある。しかし『明實錄』中には宣德二年夏四月に初めて贊善王ナムカーギェルツェンに言及している。『明實錄』一七「宣宗實錄」卷二七、二葉（〇七〇二）參照。

(83) 『明實錄』五九「孝宗實錄」卷二〇二、八葉（三七八

五)。

(84) 『明實錄』六二「武宗實錄」卷二二、一一—一二葉(〇六二八—九)。

(85) 廣本閣本『明實錄』八三「世宗實錄」卷二八一(『明實錄校勘記』一八「世宗實錄校勘記」一六三七頁)。

(86) 『明實錄』一三二「熹宗實錄」卷七四、一六葉(三六一〇)。

(87) 『明實錄』一六「宣宗實錄」卷一五、三葉(〇三九五)。同書一七「宣宗實錄」卷二二、五葉(〇五七九)。

(88) 『明實錄』四八「憲宗實錄」卷二二四、三葉(三八五一—二)。

(89) 『明實錄』二五「英宗實錄」卷七八、八—九葉(一五四五—六)。

(90) 『明實錄』二八「英宗實錄」卷一三〇、四—五葉(二五八八—九)。

(91) 註(89)、(90)と同。

(92) 註(84)と同。

(93) 『明實錄』四一「憲宗實錄」卷四四、一一葉(〇九一八)。

(94) 『明實錄』四五「憲宗實錄」卷一五六、二葉(二八四五)。

(95) 『明實錄』五五「孝宗實錄」卷一一四、二葉(二〇六二)。

(96) 『明實錄』三五「英宗實錄」卷二五六、八—九葉(五五二四—五)。

(97) デンコクのリンツァン土司に私藏された明宣德五年誥命の全文は、「皇帝敕諭朶甘衞行都指揮使司星吉兒監藏。昔朕太宗文皇帝臨御之日、爾父撒力加監藏敬順天道、輸誠來歸。朝廷設立衞門、授以官職、亦既有年。朕統天位、悉遵皇祖成憲。今爾父年老、轉令爾替職爲朶甘行都指揮使司指揮使、管束軍民、安定邊陲。爾宜益順天心、永堅臣節、俾子子孫孫世居本土、打圍放牧、咸膺福澤、同享太平。故諭。」。任乃強、澤旺奪吉前揭論文參照。

(98) 『明史』卷七六、職官五。

(99) 『明實錄』四「太祖實錄」卷九一、三葉(一五九五)。

(100) 『明史』卷三三一、西域傳三。

(101) 『明實錄』五四「孝宗實錄」卷八五、一—二葉(一五八六—七)。

(102) 『明實錄』二九「英宗實錄」卷一六六、三葉(三二一二)。

(103) 『明實錄』四五「憲宗實錄」卷一三六、一葉(二五四四)。

(104) シュヴィーガー前揭論文。

(105) 『明實錄』四〇「憲宗實錄」卷二九、八葉(〇五八〇)。

(106) 『明實錄』四〇「憲宗實錄」卷二一、四—五葉(〇四二〇—一)。

(107) 『明實錄』四八「憲宗實錄」卷二二四、三葉(三八五一—二)。

(108) 註(96)と同。

(109) 註(90)と同。

(110) 註(96)と同。

(111) 『明實錄』一一「太宗實錄」卷六五、二葉（九一八）。

(112) 『明實錄』一七「太宗實錄」卷二七、三葉（七〇三）。

entered the results in a chart. Then, having confirmed their meaning of the word *you*, I analyzed what were the relationships between those termed *you* and the writers, and what were the positions of each in local society. The following points have been made clear by this analysis.

First, with those whom were termed *you*, the writers maintained close long-term relationships whether they were local people or officials there on assignment. Calling someone *you* was never a frivolous matter.

Secondly, the relationship between the people termed *you* was often formed between fellow students in an academic setting and developed mutually thereafter. The polemics conducted between *you* sometimes caused alterations in the thought of one or the other party.

Thirdly, among these *you*, there often appear those who held no government office and those whose ancestors were not office holders. However, there were many from celebrated families who had built up their status in local society, and among these were some who had been bibliophiles and collectors of books for generations.

As a result of this analysis, Wenzhou during the Southern Song was region that epitomized this trend, which was by no means limited to Wenzhou.

ON THE HISTORY OF THE GLING TSHANG PRINCIPALITY OF MDO KHAMS DURING THE YUAN AND MING DYNASTIES

WEIRONG Shen

The history of the Gling tshang principality, one of the eight religious principalities in Tibet during the Ming dynasty, has attracted scholarly attention several times in the past. However, there are many issues that remain obscure due to a lack of sources. This article attempts to shed new light on these unresolved questions by employing new sources in the *Ming Shilu* and by comparing the Chinese and Tibetan sources. Following a brief description of Gling tshang's location and history, a detailed discussion is made on the real meaning of the phrase *bod kyi chol kha gsum*, dpon chen in Tibetan historical sources and its relation to *xifan sandao xuanwe si* in order to explain why the Gling tshang was chosen to be conferred the status of a religious kingship by the Ming court. The conclusion of the discussion suggests strongly that the Gling tshang had already enjoyed high status and authority as *mDo smad dpon chen*, possibly, i.e., the *mDo smad xuan wei shi*

because of its close tie to Sa skya pa. The conferment of the Zan shan wang title on the Gling tshang was merely one of numerous acts acknowledging the administrative order in Tibet, which had already been established by the Yuan dynasty. Sources concerning the Gling tshang in the *Ming shilu* reveal that the Gling tshang enjoyed its prestigious status and various privileges continuously and maintained its tributary relation to the Ming court through the entire period of the dynasty. Its relationship with the Ming was neither always peaceful nor limited to the Tea-Horse Trade. Also, other branches of the Gling tshang family in addition to the Zan shan wang branch were also involved in the power plays of the Ming court. These facts reflect the so-called divide-and-rule policy of the Ming dynasty towards Tibet on the one hand and the eventual decline of the Gling tshang principality on the other.

PROHIBITION, PLANNING AND THE DEREGULATION OF ACCESS TO NATURAL RESOURCES: THE DEVELOPMENT OF THE MOUNTAINOUS AREAS IN JIANGXI IN THE MID-QING

UEDA Makoto

Various studies in recent years have indicated that the so-called "prosperous age" 盛世 of the mid-Qing of the 18th century was brought to a close by the ecological limits of exploitation. In order to explore this issue historically, it is necessary to clarify the perceptions of the people at the time of the ecological limits of exploitation. The responses to the ecological limits of exploitation during the Qing dynasty were shaped by three factors pulling in different directions, i.e., the prohibition of access to natural resources, *fengjin* 封禁, the promotion of planned development, *kaicai* 開採, and the deregulation of the prohibition to the access to natural resources, *chijin* 馳禁. I have attempted to clarify the perceptual systems that upheld arguments for each response and their relations to the methods of administrative policy.

The Tongtangshan 銅塘山 dealt with in this article was called a "prohibited mountain," because access to its resources was prohibited during the Ming dynasty in order to preserve public peace. The policy of prohibiting development was carried on during the Qing. When the rule of emperor Qianlong commenced, even the officials of the central government became conscious of the rise in the cost of food, and the planned development of natural resources began to be advocated.